



墨水遺稿

卷一

特別
イ 4
3163
201(1)



貴
14
3163
201(1)

黒川春村遺稿

墨本遺稿

古物語類字鈔
競物名彙
歷代大佛師譜

東京

吉川半七藏版

墨水遺稿



緒言

我が祖父春村のものせし著述編纂やうのものあまたあれど、おほかたは寫本なれば、もたる人もおほからざるは遺憾なり、されば板本にもものせよ、と親しき友たち、あるは門人などの、ねんごろにすゝむるまゝに、さらばとて、父にもかたらひて、こたびかくはものしつるなり、

かくて出板するにつきて、よく／＼見もてゆけば、祖父がものせし後に、あるは他書より見出し、あるは初めはかくと考へしも、後には誤なることを知りて、其のよしをこゝわりたるもあり、されば祖父みづからも、さらに浄書せんとおもへど、事しげくていまだ果さず、もしさながらに人しもうつさば、頭書追加等はあひだ／＼に書くはへてよかし、なご記し置きたれば、こたび頭書追加のかぎりは、

皆その條に加へたり、
 あはれ祖父は、御國の學びに志ふかくして、なにくれご見もし考へ
 もしたれご、ここに考證の學びに心をふかめ、また國語音韻等の學
 びにこゝろを用ゐて、其のこゝろもを研究せられたれご、おほかた
 は獨り學び、獨り樂しむごもいふべくて、名をてらひ世にもごむる
 ごごは、もごより心にかげざりければ、著述にまれ、編纂にまれ、ふか
 く謙退して世に公にせしものはいご稀にして自からひめもたり、
 これ祖父のもごよりのこゝろざしになんある、
 おのれ祖父のこゝろをくみしりたれご、さては後々いかならん
 ご、ごごころおもひたりしに、こたび人々のすゝむるまゝに、まづ寫
 本にて世の中に出でたるものごもをこりあつめて、墨水遺稿ごな
 づけて板本にはものしつ、かくてこそおのがごごころおもへりし
 ごごはかなひたれば、よろこばしくて一言かくなん、

明治三十一年五月

黒川眞道識

古物語類字鈔

例言

作り物がたりの名目をつごへて、なにくごかぞへたる事はや
 くはまくらの草紙のうち、物がたりはごて十一種見え、其のち
 は彼聞えたかき、顯昭法橋の作ごかいふめる、色葉和歌集に八十
 二種見えたり、また其うたごもつごへたる風葉集に見ゆるごこ
 ろは、百九十五種の名目あり、さばかりそこの物語なりしを、應
 仁のみだれのほごにか、大かたはうせはてたりけむ、今の世に遺
 れるものは、およびをるばかりもあらずなむなりぬる、されば今
 にしては其名だにしらねなるがおほきを、もしめづらかな
 るもの見出たらむには、たよりにもなりぬべくやごて、このふみ
 めくものはかきつめたるなりけり、されごかりそめのしわざに
 しあれば、猶もれたらむもおほかめれば、またさらにも補ひそふ

べし、

無名草子は應永の頃などの物か、古物語ごも多く傳はれるほどにいできしものにて、その褒貶ごもこまやかなれば、今の世につたはらぬ限も、その大旨のしらるゝなむおほかる、たゞし今はこころせくて、たゞ片はしのみ載せられたれば、つまびらかに本書に就てみるべし、

榮花物語三鏡今かゞみのたくひ、或は大和物語今昔物語の類ひ、あるひは唐物語多武峯少將時秋物語のたくひ、或は世々のいくさ物語、また長明の四季物語のたくひなど、すべて作り物かたりならぬかぎりは、此集にはくはへざるなり、さるは又いこまあらむほご、別に類聚すべきあらましなればぞかし、舞の本おごぎ草紙など、いたく後のよのさうしごもおほかり、これらはたべちに物すべしこて皆省きつ、風葉集に載たる作名歌員をばここくく摘とりつ、さるは本書

にあはせみむに、頗たよりよろしければなり、たゞし空穂と源氏との二書をば省きぬ、あまりに歌員おほかるゆゑに、つみこらむもわづらはしければ、

風葉集に伊勢大和のうたごもをこらぬは、實記ごきはめて省きたりしなるべし、大和こそは誠にさも定むべけれ、伊勢をばいかでか實録ごはいふべき、

風葉集は善本をもて今一度考訂すべし、いはみ、いづみ、いしやま、はるこま、西のうみ、よしあし、なき名の姫君、梅つぼ、ころもあすかゝる、あくた川、ゆるき、なごいふ物かたりごも脱漏あるべし、古物語のうち二名のものあり、伊勢物語を在中將、竹取をかくや姫、みつの濱松よはのねざめを、たゞにはま松ねざめごいへる類、そのほかにも猶見えたり、これらはすべて二所に出せり、

古物語目録ごいふものあり、故山岡明阿彌翁の遺稿ごいへり、友生片山厚親その手澤本を藏せり、たゞ其名目二百三十六部を載

たり、いまだ我見よばぬものは抜いで、今くはへつ、
 古物語のうちたしかに現存のものは、其名目のうへに白圈を加へてこれをあかし、現存ながらも或は闕卷あるひは纔に残れるものは半白圈をさしてこれをわかち、また名目は古しさいへども、それは既く散失して、後世に疑作せしものあるをば、黒圈をもてまじるしとす、

引用書目

- | | |
|-----------|--------|
| 空穂物語 | 枕草紙 |
| 榮花物語 | 赤染衛門集 |
| 祐子内親王家紀伊集 | 源氏物語 |
| 紫式部日記 | 更科日記 |
| 狹衣 | 濱松物語 |
| 後拾遺集 | 今昔物語集 |
| 清輔奥儀鈔 | 寶物集 |
| 玉海 | 千載集 |
| 源氏狹衣歌合 | 拾遺百番歌合 |
| 月詣集 | 色葉和歌集 |
| 伊勢物語知顯抄 | 顯昭陳狀 |
| 石清水物語 | 顯註密勸 |
| 明月記 | 八雲御抄 |
| 長明無名鈔 | 十訓鈔 |

- | | |
|------------|-------|
| 古今著聞集 | 苔の衣 |
| 風葉集 | 塵袋 |
| 河海鈔 | 歌林良材集 |
| 無名草子 | 看聞御記 |
| 増鏡 | 花鳥餘情 |
| 本朝書籍目錄 | なぐさめ草 |
| 中御門大納言宣胤卿記 | 嵯峨物語 |
| 西洞院從二位時慶卿記 | 長頭丸隨筆 |
| 慈元鈔 | 春曙鈔 |
| 鹽尻 | 古物語目錄 |
| 道の幸 | 畫圖品目 |



墨水遺稿卷之一

古物語類字鈔卷之上

黒川春村集録

安部

秋津嶋物語

本朝書籍目錄假名書部に見えたり

秋夜長物語

按に、此物語は、北山の瞻西上人、いまだ臺嶽の衆徒けいかいと聞えたりしほど、花園のおどいの若きみ、梅若といふを三井寺にて見そめければ、便りを求めて通ひけるに、此事より亂れ發りて、山門の衆徒三井寺を焼亡ぼしければ、梅若は瀬多の橋より、入水して失たまひぬ、夫より上人は菩提心いやまし、いみじき聖となれりし事を、げに誠しく書つゝれり、されど若君の天狗にとられ給ふ事なども見えて、當時行はれたりし男色の作り物語なること決^ツなし、恐らくは應永の頃など、つくり出しものなるべし、群書類

無名草子云、あさくらかはざりなともかやうのものぞかし、あさくらははじめはいとあはれに、すゑ心にくくおぼえて見てもゆくほせに、くもでが子をほりかはせのうみたるぞかしといふほせ、むげにさだまりてにくくこそおぼゆれ云々、

あさくら山物語

風葉集戀一、山の秀才、同五、將、同中

あさぢが露物語

同秋下、露の尙侍、戀二、督中女衛、又、同入道、關、又、侍、同尙、又、兵衛、雜一、院、常業、同二、關白、又、しらみ、同三、聖の母、の

あさぢが原の内侍のかみ物語

無名草子云、ありわけのわかれゆめがたり、なみちのひめぎみ、あさぢが原の内侍のかみなどは、ことばづかひなだらかにみ、たいしからず、いとよしとおもひて見てもまかるほせに、いとおそろしき事ともさしまじりて、何事もさむるこちするこそいとくちをしけれ云々、

按に、疑ふらくは、上のあさぢが露と同書なるべし

あさ露物語

風葉集春下、あさ露戀五、同權、又、橋の

あしすだれ物語

色葉集卷三、物語、あしすだれ、

風葉集賀、あしすだれ、中宮亮、

あしたづ物語

同集哀傷、あしたづ、戀二、同、春宮、雜一、帝、又、同、院、同二、女院、又、あまつ、同三、東宮、

あしのやへぶき物語

同集夏、あしのやへぶき、又、おなじ、按察大納言女、家少將、

あしびたくや物語

狭衣卷三之中云、かうのみおぼしたらば、女宮の御ためこそ心ぐるしけれ、何の物語ぞやかゝることのあるよといへば、そのみぞおほかる、あしびたくやのおやの心こそにくけれ、少將もあまりなれども、をとおやにまたがひたるぞとよなどいふを、母宮聞たまひて、物語にてだにさばかり心づきなきことを、今はさばかりに成ぬる御ありさまを、いとかくせちに思ひなげかするも、人はいかに思ふらんなぞおぼしけり云々、色葉集卷三、物語、あしびたくや、

風葉集戀三の源大納言女又同宰相戀四同大

あじろ物語

色葉集卷三名物語あじろ

風葉集戀一の宰相

あだなみ物語

同集秋下あだなみの院旅おなじ

あたりさらぬ物語

同集春上あたりさらぬ春下おなじ戀一おなじ大臣二内同五同院又同女雜一同式部又同内

同二同院

あづま物語

同集戀一あづまの雜二同武

按に此物語の名おぼつかなしみかきが原取かへばや等に武士といふ有げなり風葉集に據て考ふべし

あはび貝物語

古物語目録に見えたり但此もまた疑ひありもしかひの物語の中の一種にはあらじ

か加部併せ考ふべし

あはれのわかぎみ物語

色葉集卷三名物語あはれのわかぎみ

あひずみぐるしき物語

風葉集冬あひずみぐるし釋教同内又同式部戀四同内又源大納言雜一同し又同左大

あふぎながし物語

同集春下あふぎながし又同宰相秋上おなじ源同中納言雜三同中納言

あふさか物語

同集戀二あふさか

色葉集卷三名物語あふ坂

逢坂こえぬ權中納言物語

風葉集賀あふさかこえぬ

按に堤大納言第五篇に逢坂こえぬ權中納言とて收めたり風葉中の歌是にあへり上件にあふさかも恐らくは同書なるべし

あふにかふる物語

風葉集春上あふに三位中將おなじ戀一おなじ中將

あふにしかへば物語

色葉集卷三名物語あふにしかへば

あふまかへる物語

風葉集秋上あふまかへる梅つぼの女御

按に、以上三種恐らくは一書なるべし、殊にあふまはあふにの寫誤なるべきこと決なし。

逢の中將物語

色葉集卷三名物語逢の中將

按に、逢はもし逢などの誤歟、

あま物語

同集卷三名物語あま

八雲御抄卷一云、海人、

風葉集雜三あまの女、

按に、次下に海上子物語あり、必同書とおぼし、

海人菫藻物語

拾遺百番歌合右海人菫藻三首

色葉集卷三名物語あまのかるも、

貞永二年三月二十日明月記云、海人菫藻文詳朝

風葉集春下あまの菫藻冬おなじ釋教同初瀬戀四權大

無名草子云、今やうの物がたりにとりては、あまのかるもこそまめやかに、えんある所

などはなければ、ことばづかひなども、よつぎをいみじくまねびて、またゝかなるさ

まなれ略中すゑはのつゆあまのかるもとて、ひとてに申すめれど、ことばづかひなど

も、むげにたいありにぞあめる云々、

按に、今流布の本は、上文の古物語ならず、されどそのみ文體いやしからず、無下に後世

の物とも覺えず、恐らくは鎌倉の末より、室町のはじめの間に、作り出し物なるべし、但

大納言江侍従内侍など風葉集見ゆ古きかたと同名の見ゆるは、もとのをえまらでかける

には非ず、もし缺卷などの残れるを見て、殊さらに作れるか、此書古寫二本もて考訂し

て、系圖年立をも作りおきぬ、別巻として附録にそふべし、

海人子物語

寶物集卷五云、難波ノ浦ノ海士ノ子ハ、十六年ト云ニ願力ニヨリテ、兼光少將ノ妻ト生
レ相タリトコソ、海士子物語ニハ申タルゾ云々、

按に、上件にあま或はあま人とあるも、恐らくは同書なるべし、

あまのもしほび物語

風葉集春上あまのしほ、大僧都、春下同、僧都、秋上同、親王、神祇、同院、釋教、同院、新中將、又、后宮、太又、僧都、賀、同院、又、同院、戀一、都、大僧又、言三君、雜一、大僧都、又、中宮、新宰

あまやごり物語

同集冬、太宰權帥重康、釋教、女御、

あめのした物語

色葉集卷三、物語、あめのした、

按に、古物語目録にあめのあしと見えたるは、此物語の寫誤なるべし、

あらばあふよ物語

風葉集春上、あらばあふ、夏、同、み人、又、同、納言、

有明の別物語

同集釋教、別、有明の帝、哀傷、同、内、又、宮、中、戀一、同、左、同、二、白、同、關、又、同、院、又、女、院、又、中、務、卿、の、み、又、同、左、

同五、中務卿の北の方、又、左、大、又、し、み、人、雜一、女、院、又、し、み、び、

無名草子云、あり明のわかれゆめがたり、なみちの姫君、あさちが原の内侍のかみなど
は、ことばづかひなだらかに耳たゞしからず、いとよしとおもひて見もてまかるほど
に、いとおそろしき事どもさしまじりて、何事もさむる心ちするこそいとくちをしけ
れ云々、

ありまのわうじ

按に、古物語目録に見ゆれば、姑く爰に載すといへども、疑ふらくは御伽草紙やうの後
世物語なるべし、さて慈元抄云、昔有馬の王子零ぶれ給て、下野國まで下り給ふ、其國に
五萬長者とて富人あり、其に立寄せ給て奉公すべき由を宣ふ、長者置奉り、或時酒宴の
半に、巡の舞ありて皆舞けり、彼若殿原も舞べしと長者云ければ、王子やがて立て歌を
よみ給ふ、いなむしろ、川そひ柳、行水に、ながれをれふし、その根はうせず、と詠じて舞
給ければ、長者只人にあらずとて座敷を立て、御手を引て上座におき奉けるとなむ、其
頃長者獨の娘を持たり、かねては常陸の國司に參すべきよし約束ありければ、彼王子
忍逢給て、程なく懷妊有ければ、國司より催促有けれど、娘は早死したりし、とて、喪葬の
儀式をなして野邊に送る、棺にはつなじと云魚を入れて焼て烟をたつ、彼魚は焼匂ひ人

を焼に似たればなり、其心を讀る、東路の室のやしまに、立煙たがこのしるに、つなヒ
焼らむ、子のかはりに焼とよめり、それよりしてこのしると云となむ云々と見ゆるも、
恐らくは此物語なるべし、但こは顯宗天皇紀の故事をとりて、無下に拙く作れるにこ
そ、

再按、これを御伽草紙やうの物かといひしは失考なりけり、はやく八雲御抄卷一に有
馬王子と見えたり、

あれまく物語

風葉集釋教、あれまくの
大納言大君、

伊部

伊勢物語

枕草紙卷四云、とく〜といふに、いせの物語なるやとて見れば、青き薄様にいと清げ
に書るを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり云々、

源氏物語繪合卷云、つぎに伊勢物語に正三位をわはせてまださだめやらす云々、

清輔袋草紙卷二云、伊勢物語、和歌二百五十首、但本々
不當業平朝臣所爲也、偏非彼人作歌耳、

古今之間歌、有興之、書載歟、又不論、自佗隨便同人歌様書列之、若是密事ヲ令混之故歟、萬
葉集多入之、又其名目有二義、有密事之故爲構、僻事之由ニテ號伊勢物語、諺伊勢僻云故
也、一齋宮事爲詮、故號伊勢、是正義歟、泉式部本以齋宮事最先書、
八雲御抄卷一云、伊勢上下、

長明無名抄下、假名書事云、和歌のことば、伊勢物語ならびに後撰の歌のことばをま
ねふ云々、

河海抄卷十七、惟本卷もろ
の註云、左右音聲、伊勢物語眞名本、

按に、水野大監物殿秘藏に、此物語の繪二卷ありて、書畫ともに誰が筆ともえらねど、丹
青筆意微妙じきものなり、また更科日記に、さい中將と見ゆるも、恐らくは此物語なる
べし、

いせを物語

風葉集春上、いせをの
條院女三宮、夏、
左大將、秋上、
同前關、秋下、
同右衛、
釋教、前關、
白戀五、
式部卿の、
み

いちひひろひ物語

風葉集雜一、いちひひろひ
の大納言北方、

按に、色葉にいらひ日るゐどあるも是也、

岩うつなみ物語

同集秋上、浪朱雀院、又、同宰相戀一、同内大臣、同四内大臣、色葉集卷三、物語いはうつなみ、

岩垣沼物語

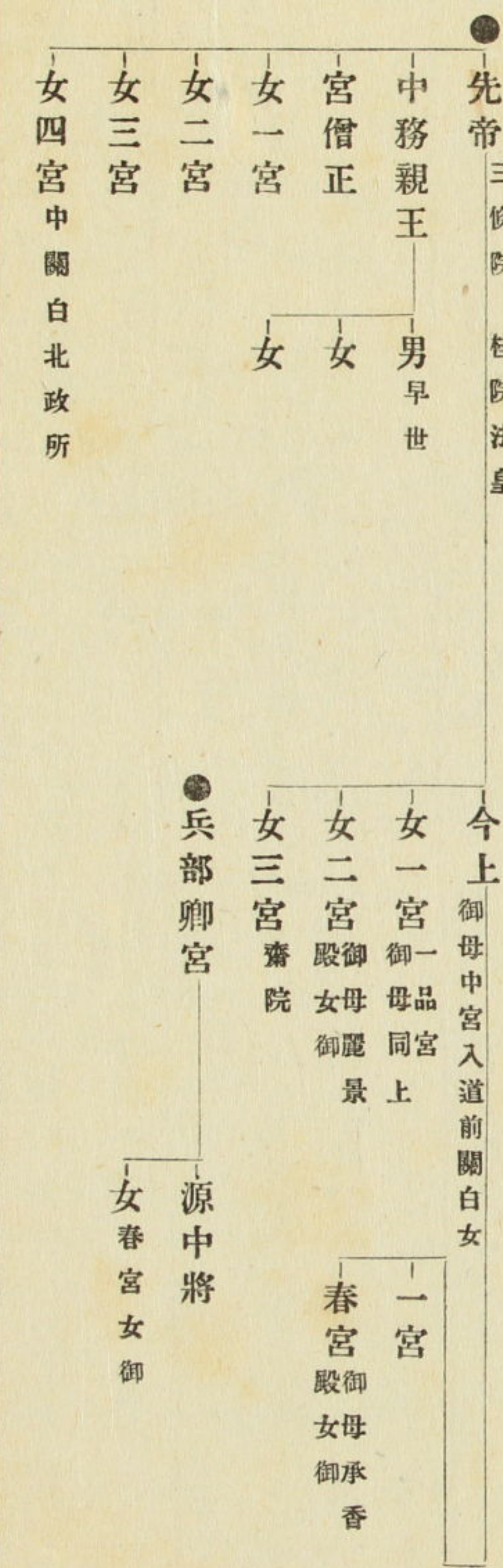
後拾遺集雜一云、五月五日、六條前齋院に物語合し侍けるに、小辨おそく出すとて、かたの人々どめて、つぎの物語を出し侍ければ、宇治太政大臣、かの小辨が物語は見所やあらむとて、こと物がたりをどいめて待侍ければ、岩垣沼といふ物語をいだすとてよみ侍ける、曳すつる、岩垣沼の、おやめ草、おもひえらずも、けふにあふ哉、

風葉集夏、いほがき沼神祇、同じ住、又、同頭、戀一、中將、按に、榮花物語卷三十七、煙後卷云、先代とは後朱雀院とぞ申める、其院の高倉殿の女四をこそは、齋院とは申めれ、幼なくおはしませせ、歌をめでたく詠せ給、さぶらふ人々も題を出し歌合をし、朝夕に心をやりてすぐさせ給、物語合とて、今あたらしく作りて、左り右方わきて、甘人あはせなせさせたまひて、いとをかしかりけり、とあるを見れば、此物がたりは小辨の作なるべし、小辨は作者部類に、祐子内親王家女房越前守懷尹女、尊卑分脈に、武智磨流正五下越前守式懷尹女子康和五九卒と見えたり、

いはし水物語

風葉集夏、いほ水、又、同兵部卿、又、同中神祇、伊豫守、又、八幡、按に、此物語は、風葉にすこし先だち、色葉よりは後に出来しなるべし、詞づかひ大かたはよくて、たましく後さまの鄙語ども、まじれり、ざるを奥書に、正三位のよし書る本あり、正三位は源氏よりも古くて、必いみじき物語ならむを、今の世にありと聞えたらねば、慥にもいひ難けれど、ともかくも此物語は、風葉に載たる五首の歌もあへれば、石清水なる事炳然きものなり、猶正三位の事は志部にいふべし、さて此物語の系圖をえ

石清水系圖



●入道前關白

中關白 左大臣前關白

内大臣 二位中將中納言

右大將 侍從三位中將秋中納言

女藤壺女御

女東對君後

實按察大納言女

少將母關白女

二郎君母同

女母同

●右兵衛督

女常陸守妻

女宰相白妾

關白 大將内大臣左大臣

權中納言右衛門督

左大將 春少將二位中將春中納言

女中宮

女内大臣北方

前右大臣

宰相中將

右兵衛督

女承香殿女御

女關白北方

●常陸守

犬若

乙若

伊豫守 後爲法師

いはで倉卒に物しければ恐らくは違へるもの有べし、他日なほ考訂すべし、
いはで志のぶ物語

風葉集春下の嵯峨院二首、又同法、又同帝、又同一条院、又同一条院、秋上、同佐衛、又同左、秋下、同關、釋教、
内一条院、哀傷、關白戀二、御息所、又、皇、后、同三、一条院、内、同四、女院、又、の院、又、内一条院、同五、皇、后、
又、内一条院、又、左衛門督、又、女、四、の院、又、の院、雜一、女院、又、の院、又、將、大、同、二、門督、又、式部卿宮、又、中納言、
又、關白、
又、二首、

いはや物語

同集別、いはやの賀、按察大戀一、兵衛佐、同五、左兵衛督、

按に、色葉集に、いりやとあるも、恐らくは此寫誤なるべし、

再按、天和二年に書る、陰式要法卷十三、婚姻の調度の中、物語草紙とて、伊勢源氏住吉な
どに並べて、岩屋物語と載たるを見れば、此書もし現存せるか尋ぬべし、

今かくれみの物語

按に、古物語目録に名目見ゆれば、姑く此に載すといへども、かゝる物語あるにはあら
じ、其故は無名草子に、いまとりかへばやとて、いといたきもの、今の世にいできたるや
うに、今かくれみのといふもの、おし出す人の侍れかし云々、とあるを見るべし、さやう
の物語つくる人のあれかしとこそ見ゆれ、いまだありとはあらざるをや、
今ごりかへばや物語

風葉集春上今太政大臣卿君別吉野の中君戀二關白戀四中宮雜二中將又よみ人又中宮
按に、此物語の事、と部取替ばやの條に説あり、合考すべし、

いまめきの中將物語

顯註密勘卷十八經いさこにわが世は云、惠心僧都の勸女往生義と申造紙に、いまめきの中將長井の侍従、伏見の翁などいふ、古物語ありとのせられたり、さやうの物の有さまを、よみたりける歌にや云々、
河海抄卷二十蜻蛉卷芹が云、惠心僧都の勸女往生義といふ物に、いまめきの中將長井の侍従、伏見の翁などいふ古物語ありといへり、是皆今の世に不傳、この芹川の中將もさやうのたぐひ歟、

今様物語

按に、此名目、古物語目録に見ゆれば、姑く此に載たるなれど、こは無名草子の文を、聞僻めたる誤りなるべし、其文云、今やうの物がたりにとりては、あまのかるもこそまめやかに、えんなる所なほはなけれども、ことばづかひなども、世つぎをいみじくまねびて、また、かなるさまなれ云々、とあるを見るべし、此をふと見誤りて、一種の名目と思へる物なるべし、色葉風葉などに見えぬも、一證といひつべし、

いらひ物語

按に、此物語もまたおぼつかなし、色葉にいらひと見ゆれど、必何かの寫誤なるべし、再按、いちひ拾ひなり、上に見ゆ、此條は除くべし、

宇部

うき雲物語

風葉集戀五うき雲の藤

按に、こは必うき浪の寫誤なるべし、善本に據て訂すべし、

うきなみ物語

風葉集春上うきなみの藤春下同女夏權中納言又藤中納言戀二權中納言又皇后戀四一條院又權中納言又同五雜三二首

無名草子云、たかのぶのつくりたるとして、うきなみとかやこそ、このほかに心にいれて、つくりけるほと見えてあはれに侍れど、こともなほかことばづかひなぞてづ、けにて、心ゆきておぼえ侍らず云々、

うたゝね物語

風葉集冬きさいの宮又、みか釋教の尼つら戀三きさい宮同五、みやなじ

内の女御物語

色葉集卷三名、物語内の女御

宇治の川なみ物語

風葉集夏うぢの川波の別式部卿雜一の帥御子又、式部卿

無名草子云、うぢの河なみこそあまのかるもを、あましまねびたれどもあしくもなし、

宇治橋姫物語

顯註密勘卷十四しきむしるに衣註た橋姫物語云、昔妻二人もたりける男、本妻のつはりして、七磯の和布を願ける、もとめに海邊に行て、龍王にとられて失にけるを、本妻尋行ける程に、濱邊なる庵に宿りたりける、おのづから此男にあひにけり、此歌をうたひて海邊より來れりける也、さて事のやういひて曙ければ失ぬ、此妻もなく歸りにけり、今の妻此事をきゝて、はじめのごとく行て此男をまつに、又此歌をうたひて來ければ、我をばおもひ出すして、本妻を戀にこそとねたく思て、男に取懸たりければ、男も家も雪などの消るが如くに失にけり、世の古物語なれば委不可書、ちはやぶる、うぢのはし姫、なれをしぞ、あはれとは思ふちはやぶる以下廿三字刊本年の經ぬればとあり、此も

此事を思てよめるにこそ云々、今按に、物かたりつくるには、さもことよりたる歌を本として作りて、其歌を書載る常事也、此ちはやぶる、うぢのはし姫の歌にて、其歌をかきて橋姫の物語となづけたる歟、

此歌又分明、先人幼稚の時、はし姫と云し物語を、めものどのよみてきかせしが、あはれにおぼえて落涙、成人之後みばやと思ふに、その物語不尋得、其に此歌は有し也と申されき云々、

按に、此先人とあるは俊成卿なり、此卿は元久元年十一月卅日に九十一歳にて薨せられたれば、永久二年の誕生なり、此に據るに此物語は、保安天治のころはひ迄は世の中に流布せし物にて、其後は失けるなるべし、風葉集に此歌の見えぬも傳はらざりし故にてもあるべし、

色葉集卷三名、物語はしひめ、

八雲御抄卷一云、宇治橋姫、

河海抄卷十七橋姫云、橋姫は宇治の橋の神なり、略中宇治の橋姫といふ物語にあり、

歌林良材集下云、さむしろに、衣かたしき、こよひもや、われを待らむ、宇治の橋姫略中千はやぶる、うぢの橋守、なれをしぞ、哀とは思ふ、年の經ぬれば、讀人不知右此歌は古今集

の一本に、うぢの橋姫とかける事あり、又橋姫の物語といふ物あり、それに此二首の歌をかける、但定家卿は、彼物語不可用由あるされたり、

書圖品目云、橋姫物語一卷、畫者姓名不傳、詞白河三位雅喬卿といへり、

按に、かく品目に見えたる物は、いまだ見ざればうけはりても云がたけれど、恐らくは後の物にて、もとのにはあらざるべし、雅喬王はたいと近き世の御方なり、元祿元年十月十五日薨

へり、

うつせみまらぬ物語

風葉集秋上、うつせみ中將、釋教、清水御歌、雜三、中將、又、中宮、

按に、古物語目録に、うつせみとあるも是をいへるなるべし、

空穂物語

枕草紙春曙抄卷九云、住吉うつぼのるゐ云々、

源氏物語繪合卷云、まづ物語のいできはじめのおやなる、たけどりの翁に、うつぼのどしかげをあはせてあらそふ、中どしかげははげしき波風におぼれ、まらぬ國にはなたれしかど、猶さしてゆきけるかたのこゝろさしもかなひて、終に人のみかどにもわが國にも、有がたきさえの程をひろめ、名を殘しける古き心を、いうにゑのさまも

ろこしと日のもとをとりならべて、おもしろき事ども猶ならびなしといふ云々、同螢卷云、うつぼのふちはらの君のむすめこそ、いとおもしろかにはかゝしき人にて、あやまちなかめれど云々、

狭衣卷一之上云、かくやせそこなはるばかり思ふらむことこそ心えたれ、なかずみの侍従がまねし給へるなめりな、人もさぞかたりし云々、

按に是も亦空穂なり、仲すみはあで宮春宮に御まゐりの、ち思ひわびてうせたまへり、藤原君卷、愛宮卷、等を見て心うべし、

濱松物語卷一、もろこしの后の云、后もいみじう物をあはれとおぼしとめて、ものゝてうしゑらべかはし心ゆくかぎりひき給へる、そらにひきのぼりてきこゆ、うつぼの物語の内侍のかみのひきけむ、なん風はし風のねも、かうはあらずやありけむと思ひやらるゝに云々、

色葉集卷三、物語うつぼ、

石清水物語上云、われはありつるゑまきはてゝもちて参りぬ、中納言の御もとより、参らせられたるうつぼのゑなりけり云々、

風葉集序云、うつぼのなつこそ神といへる歌は、拾遺集にいりて、すみよしのこれを入

相の連歌は、小一條院のおほむ歌とか聞ゆ云々、
 河海抄卷八繪合卷云、うつばの物語源順作云々有
 無名草子云、源氏つくりいでたることこそ、おもへどく、此世一ならずめづらかにお
 ぼゆれ略中わづかにうつば竹とりすみよしなとばかりを、物がたりとて見けむ心ち、
 さばかりに作りいでける、凡夫のまわざともおぼえぬことなり云々、
 鹽尻卷廿云、空穂物語は源順朝臣の作とかや、彼物語に、あかなくにまたさも月のなん
 とのたまひてといへば、伊勢物語の後作なる事明らけし云々、

梅壺の少將物語

枕草紙春曙抄卷九云、梅壺の少將、

梅めづる物語

風葉集春上梅めづるの宮君

埋木物語

枕草紙春曙抄卷九云、うもれ木、

風葉集冬埋木の少將、戀二おなじ、

うらみまらぬ所物語

同集別うらみ所の泉

うらもり物語

古物語目録に見ゆれとおぼつかなし唐守、

於部

老人のかたみ物語

色葉集卷三名物語、老人のかたみ、

風葉集雜一老人の源大納言女、

落窪物語

枕草紙春曙抄卷十一月の條、云、げにかたの、少將もどきたる、おちくぼの少將などはを

かし云々、

色葉集卷三名物語、おちくむ○按に、むハ武の草體、ぼの假字につかひしな

風葉集春上おちくむの春下、同、夏同別、中宮、又大納言の四君、賀しらす、又おなじ、

おとしぶみ物語

同集戀二おとしぶみの中將、

おのれけぶたき物語

色葉集卷三名物語 おのけぶたき○按に、れ文字脱也
風葉集釋教たきの大將 戀二同人 雜二のなみこ

大津のわうじ

狹衣卷二之下云、いとかばかりのこゝちながらは、すぐすべきやうもなきに、我ながらなぐさめかね給て、おほつのわうじの心中をさへぞおぼしやるに、秋の月は程なくこそなぐさめ給へれ云々、

按に、色葉集卷三に、いらひ 日ろゐ 大津のわなど見えて、何物語とも解し難かりしを、今おもへばいちひ拾ひと、大津王子となりけり、王子をわなに誤れる也、いちひひろひは風葉に見えたり、

おほる物語

狹衣卷三之下云、おほるの物語のやうならば、限の道にもえ見すてたまはじとこそおぼゆれ云々、

濱松物語卷四中納言大將尼姫君と云、おほるのものがたりのやうに、ともにがくの聲を待つけむとのみ契かはし給さま、心深くあはれなり云々、

おもかけこふる物語

風葉集冬面かけこふる三位中將 哀傷おなじ中將

おもはぬかたにごまりする少將物語

右堤中納言第五段に收めたり、

おもふにくるしき物語

色葉集卷三名物語に見ゆ、

おやこの中物語

風葉集春上おやこの中 秋上内大 秋下おなじ人二首、又中宮 冬帝、又内大 賀春宮 戀一内大 同三、
中宮、同四、中宮、又内大 雜二、中宮

加部

かいはみ物語

色葉集卷三名物語 かいはみ、

風葉集秋下かいはみ右 又太政大 冬右大 神祇住吉、又右大 戀五兵部卿、雜三、大將、
按に、かいはみは垣間見なり、夜寢覺物語卷一に、ある山里にはのかなるものをこそみ

たまへりしかと申給へば、なにぞと問はせ給ふを、かりの枕をば残しとゞめて、琴の音よりうちはじめ、かいはみせし事を申給て、其品ならずいといみじくいふに云々、とあるをも見るべし、

枕草紙春曙抄三、にげなき物條に、或人の局に行てかいはみして、又もし見えやすくてきたりつるなり云々、

○
かくや姫の物語

源氏物語蓬生卷云、ふるめきたるみづしあけて、からもりはこやのとじ、かくや姫の物語のゑにかきたるをぞ、時々のおまざぐり物にし給ふ云々、

顯昭陳狀云、これはもしかくや姫の物語に付るゝか、其は別事なり、

按に、竹取物語なり、

かくれみの物語

狭衣卷二之下云、ばちの音をかしうあいぎやうづきて、雲井はるかにひゞきのぼる心ちするを、かくれみのゝ中納言の、二の舞にやならむとむづかしければ云々、

同卷三之中云、過にしかたのかくれみのを、見あらはす人のなかりしこそ云々、

同卷四之中云、又かくれみのゝ中納言やおはすらむなぞ、口々たはふれにいひなせど、

君は誠にもの恐しくて、顔ながら引かつきてふし給へり云々、

寶物集卷一云、昔より隠蓑の少將と申物語も有まじき事を作りて侍るところうけたまはれ云々、

色葉集卷三、物語かくれみの、

風葉集春下、かくれみの、夏將、左大又、中納言神祇前齋、釋教將、左大戀一、先帝の、又、左大同三、源

納言雜二、左大雜三、前齋

無名草子云、又かくれみのこそめづらしきことにとりて見どころありぬべきものゝ、

あまりにさらで有ぬべきことおほく、ことばづかひいたくふるめかしく、歌なごのわろければにや、ひとてにいはるゝ取かへばやには、ことのはかにおされて、いまはいと見る人すくなきものにて侍る、あはれにもめづらしくも、さまゝにみどころありぬべき事におもひよりて、むげにさせる事もなきこそ口をしけれ、いまどりかへばやとて、いといたきもの今の世にいできたるやうに、今かくれみのといふもの、おしいだす人の侍れかし、いまの世には見どころありて、まいる人もありなむかし、

按に、古物語目録に、今かくれみのといふを載せたれど、そは僻事なるよし、伊部に辨へ

再按、狹衣卷一之上云、さりともなすらへなるひとありなん、どたのもしくおぼされしを、彼よし、かたがかくれみのをえ給はねども、おのづから高さもいやしきも尋ねよりつゝ云々、と見ゆるも此物語をいへるにか考ふべし、

かさぬる夢物語

風葉集釋教の法輪御歌、雜一、大將、

かすみへだつる物語

同集雜一、つる左大將、同二、み、又、左大將

風につれなき物語

同集春上の風につれなき、院、春下、宇治入道關大臣、秋上、太政大臣、又、冷泉院、又、吉野院、秋下、一品、又、太政大臣、又、女、二、又、關白、又、右、大、又、吉野院、神祇、御歌、又、院、野、釋教、關白、別、中將、野、院、旅、兵部卿、哀傷、太政大臣、又、左、大、又、關白、又、冷泉院、賀、二、院、戀、一、太政大臣、同、三、吉野院、又、女、院、又、太政大臣、同、三、右、大、同、四、吉野院、同、五、道、皇后、入、雜、二、二、首、大將、又、納言、大、又、院、野、同、三、三、首、院、又、道、姫、宮、又、白、宇治入道關大臣、合、四、十、五、首、此、内、五、首、見、于、現、本、

按に、此物語古鈔本一卷、紙本、新宮侯所藏本、近曾刻成て丹鶴叢書中に收められたり、卷中の歌廿四首あるを、風葉に合せみるに、其あふものは只五首なり、此に據て考ふる

に、全部十巻ばかりなりしが、第一巻のみ残れるものと見えたり、

かたの、少將物語

枕草紙春曙抄卷九、云、かたの、少將、又、卷十一、月のあ段、云、げにかたの、少將もどきたる、おちくばの少將などはをかし云々、

源氏物語帚木卷云、なよびかにをかしき事はなくて、かたの、少將にはわらはれ給ひけむかし、又、野分卷云、ふきみだりたるかるかやにつけ給へれば、人々かたの、少將はかみの色にこそと、のへ侍れときこゆ、さばかりの色も思わかざりけりや云々、
色葉集卷三、物語、かたの、少將、
風葉集戀四、大領女、

河海抄卷二十原に蜻蛉巻、云、これは紫のうす様にかきて、かるかやにつけたるが、紙の色に

花鳥餘情卷十五、野分、云、これは紫のうす様にかきて、かるかやにつけたるが、紙の色にたがひたると、人々どがめたるなり、なみのしめゆふといふ物語に、よそへつつみれどかひなし、かくてのみひとりはいかが井出の山ふきふりにたる事なれど、かみの色に似たるこそをかしけれとて、山吹につけ給ふ、かたの、少將にやなるらむ、今按、交野少將はかみの色に似あひたる枝につけたるを、夕霧の心にはかならずしも然るべか

らず、何にても其時にしたかひたる花につくべきと思給へるにや云々、
按に、尊卑分脉云、左大臣藤武智麻呂公男、參議巨勢麻呂卿流、左少辨兵雄孫左中辨千乘チシキ
類作者部二男、季繩チシキ右近少將從五位下、世と見えたるは仁和頃の人なり、此人の事跡を
作れる物語なるべし、玄旨法印の百人一首抄にも、右近が父季繩少將を、交野少將とい
ふといへりと見えたり、又落窪物語に辨少將をかたの、少將といふ事見ゆ、

かつらの中納言物語

風葉集春下、兵衛佐、秋下、關白、

河海抄卷七、蓬生云、或説かつらの中納言物語といふ物有、源氏以後の物なり、彼宮貧家
の女大號小几丁のかたびらをさぬにぬひてきたる事あり、

花鳥餘情卷九、蓬生云、かつらの中納言の物語、いさゝか似よりたる事なり、それはまど
しき女をいへり、常陸の宮の事に便あるにや、

かつらのみや物語

色葉集卷三、物語名、かつらのみや、

按に、上のおなじ物語なるべし、

川がり物語

風葉集春下、の、内大臣、又、同じ大臣、賀、中宮新戀二、内大同五、同内大臣、雜一、新中宮、同二、中宮、新
無名草子云、あさくら、かはぎりなともかやうのものぞかし云々、

かばね尋る宮物語

更科日記云、しどくなる人のもとより、むかしの人のかならずもとめておこせよ、とわ
りしかばもとめしに、その折はえみいでずなりにしを、いましも人のおこせたるが、あ
はれにかなしき事とて、かばね尋る宮といふ物語をおこせたり云々、

風葉集釋教、三、の、み、尋る、哀傷、三、の、

かはほり物語

狭衣卷四之中云、あなおぼつかなのわざや、かはほりの宮にやなんと打笑ひたまふ云
々、

風葉集冬、の、少將、戀一、少將、雜三、中務卿、宮女、

按に、源氏物語蓬生卷にからもりはこやのとじ云々と有からもりも、疑ふらくは此か
はほりなるべし、委しくは唐守の條にいふをみるべし、

かひあはせ物語

堤中納言第六段、かひあはせ、按に、風葉に載る、歌、あり、

風葉集雜三の藏人少將はせ

かひ物語

風葉集神祇はひの物語中大辨西海、雜三あま貝の

かほよきまひ姫物語

同集戀五の藏人少將舞姫

按に、風葉に載たる歌にかへしありて、とばりわけの君と見ゆ、若此とばりわけは同物語にはあらじか、風葉につきて猶考ふべし。

かやが下をれ物語

風葉集秋上の嵯峨院中宮冬宣耀殿又關白釋教關白哀傷宣耀殿又按察又大將戀一關白同三關白同五院又臣北方大雜三中將位

からくに物語

狭衣卷二之下云、もしから國の中將のやうにこもちひじりやまうけんとするらんと我ながらまれ〜ひとりゑみせられ給ひけり云々、

濱松物語卷一云、かんこくのせきにつき給て、日くれぬれば關のもとにとまり給ひぬ略○中 此關に御むかへの人々参りたり、その有様もからくにといふ物がたりに、ゑに

しるしたるおなじことなり云々、

からもり

源氏物語蓬生卷云、ふるめきたるみづしあけて、からもりはこやのとじ、かくや姫の物語のゑにかきたるをぞ、時々まさぐり物にしたまふ云々、

河海抄卷七蓬生云、唐守、藐姑射刀自、熾奕姫いづれも古物語也、

按に、唐守の名目おぼつかなし、もしらはうの寫誤にて、疑ふらくは風葉に見えたる、かはりの物語と同物にはあらざるか、或人伊勢集に、からもりが道尋わびてふせる男とある詞を引て、唐守の證としたれど、類從本にはかねもりが家に、道たづねこうじてをる男とありて、此方よろしげなれば従ひ難し、又空穗樓上上下に、からもりが宿を見んとて、玉銚にめをつけんこそ、かたは人なれとも見ゆれど、是はた意を解し難ければおぼつかなし、

伎部

京太郎物語

道の幸多武條云、宿院にかへりてのち、坊々の所持とて、書畫もあまた持來て見せぬ、其

中に爲相卿の筆の京太郎物語といふあり、手は似て侍れども此物語の時代いかにぞや云々、

久部

くさゝの岑物語

色葉集卷三、物語くさゝの岑、

くじやくの御子物語

「右古物語目録に見ゆれど、古代めかぬ題號也、もし御伽草紙類の後のものにはあらじか」
可除

八雲御抄卷一云、孔雀御子

國ゆづり物語

枕草紙物ありは云、國ゆづり、

按に、國讓は宇津保の卷の名にも見ゆれど、枕草紙にうつばの外に亦載たるをみれば、さる物語も有けるにぞあるべき、

くまのゝ物語

色葉集卷三、物語くまのゝ物語、

按に、こまのゝ物語の寫誤にはあらじか、古部考ふべし

雲井の月物語

風葉集春上、雲井の月の春下、いほ宮、夏、左大戀五、同、左大將、

計部

けぶりにむせぶ物語

同集春下の姫宮新宰相、雜三、ひなじ

けぶりのしるべ物語

同集雜一、煙のゑるべの女、又、この北方、同二、中將、

現立物語

古物語目録に見ゆ、

源氏物語

紫式部日記下云、うちのうへの源氏の物語人によませ給ひつゝ、聞しめしけるに、この人は日本紀をこそよみ給べけれ、まことにさえあるべしとのたまはせけるを、ふとお

しはかりにいみじくなむさえあると、殿上人などにいひちらして、日本紀の御つばねとどつけたりける、いとをかしくぞ侍る云々、

榮花物語卷五浦々の別卷の云、内大臣のおりさせ給ぬ、げびいしどもみなおりてなみゐたり、みたてまつれば、御としはたゞ今廿二三ばかりにて、御かたちとのほりふどり、清げにていろあひまことにめでたし、かの光源氏もかくや有けむとみたてまつる云々、同卷卅一殿上花見卷かむのどの皇太后宮のおはしまさぬこそは口をしき事なれど、いかでかはさのみおもふさまにはおはしまさむ、ひかる源氏かくれ給てなごりもかくやとどさすがにおぼえける云々、同卷卅六根合卷云、源氏の三でうの宮おはせでのち、大將むかしにおどらす、うちのおほとの、姫君とみ、ちておはするごとくいひたるこゝちぞさせける云々、同卷四十むらさき卷云、かの源氏のかゝやく日のみやの、尼になりたまふ願文よみあげしむこゝちして、やむ事なくめでたし云々、

更科日記云、何をか奉らむ、まめくしきものはまだなかりなむ、ゆかしくし給なるものを奉らんとて、源氏の五十餘卷ひつに、いりながら、さい中將、とをぎみ、せり川、しらゝ、あさうづなといふものがたりども、一ふくるとり入て、えてかへるこゝちのうれしさぞいみじきや云々、

千載集戀四云、寄源氏物語戀と云心を讀侍ける、ふみ人見せばやな、露のゆかりの玉かづら、心にかけて、忍ぶけしきを、またあふ坂のなを忘にし、中なれど、せきやられぬは、涙なりけり、

拾遺百番歌合、左、源氏歌略、

源氏狭衣百番歌合、左、源氏、右、狭衣歌略、

貞永二年三月二十日明月記云、日來撰出物語月次五十二月所不入源氏并狭衣文詳三朝倉條、

長明無名抄下、假名書事、物語は源氏にすぎたるものなし、

無名草子云、なほ源氏とてさばかりめでたきものに、此經の按に法華もじの一偈一句おはせざるらむ、なにごとかつくりのこしかきもらしたる事ひと事も侍る、これのみなむ、第一のなんとおぼゆるといふなれば、あるが中に若き聲にて、むらさき式部が、法花經をよみ奉らざりけるにやといふ云々、

安居院聖覺法印源氏供養諷誦文之記云、あて院のせいがかく法印の庵は、西ひむがし二所にあり、東の坊は静にて常に人なし、心をしづめて説經なぞ按ずる所なり、せもんと云承仕法師ぞひとり住ける、西の房は弟子ども集て常に學問し、客人などにあふ所也、又奥の房とて女房達ゐて、うちくの事どもする所也、或時三月中比、聖覺大僧都とい

つし時、説經按じて東の房に、素絹のきぬはたもなきに布けさかけ、しりきればきて縁行道しける程に、東の方より車の音しけり、東はどうくの谷にて車なと通はぬに、いかならんとあやしく覺えて、耳を立て聞程に、此門の前に車を止めてことごとくしくたゝく、いかなる人にかと驚き、専門といふ承仕に門をたゝくはきかぬかといへば、居眠けるがねおびれて、まさいをとはずさうなくわけつ、僧都車寄の妻戸へかは入てのぞきければ、大八葉の車かけ色なるに、そめききたれる下簾ながやかにかけて、白川だち牛の額じろなるを、清げなる牛飼ゆらへ落ちたり、興乗のきたり中間五三人許やりいれぬ、僧都こは誰ならむと思へども、せもんは逃入ぬ、又とはすべき人もなければ、めもあやにのぞきぬたり、かけはづしてやがて此妻戸へよす、女房なめりと思て、自ら車寄のむしろをさしいれば、中間妻戸の扉を立よせつ、おりたる人をみれば、廿二三許なる女房、紅の袴に薄衣きたるおりたる、僧都のぞきぬたる程に、又おるゝをみれば、廿四五許なる尼御前、色白くこまやかなるが、はた薄かきの小袖白き袴を着てやをら立たる、僧都中の障子をあけて逃入、いかなる人にかと、おぼつかなさにくわづくるへば、此女房物申候はむといふ、何事かはと答ふるに、東山の邊より申べき事候て、人のわたり候と云、是は誰もとておぼしめし立て御わたり候やらむといへば、女房すこしあやま

りたる氣色にて、是は説經させ給僧都の御房の許かどて、御供の者ども御車いれ參らせて候、ひが事に候やらむといふ時に、僧都説經なと時々仕れども、東山の邊より誰こそ御わたり有べしとおぼえずといふ、女房うるはしき人なとこそ、東山の誰とは候へ、ふしきの谷の底なる人なれば、申ともし給はじ、又名なと有程の者にて候はず、げざんして申さばやといふ、其時僧都ちとよき衣絹のけさかけて、障子のそへにゐたる氣色也、これは物はぢなとすべきやうなければ、廣ちがひわけつ、尼御前御對面とおぼしくて、北向にゐたるが、西向にちとゐなほりたる、かほことがらみるに、只人ともおぼえず、物いはむとするに、耳の方より次第に顔の方へあかみて、つゝましげなる物から申つけて、はゝかりある事なれども、幼くより源氏と申草紙を深く心にそめて面白く思しが、去年の春の比より思たる事は、かゝる身になりて今は思まざる事なく、後の世の事を心にかくべきに、見馴し事のわすれず心に懸りて、其卷にはとあることの有しなと思はれて、念佛のまぎれとなりぬべきが、罪ふかき事と思しられて、其ざんげの爲に此本を自かき人にもかゝせてあまた候しを、ことさらやりて經の料紙になして、みづから法花經一部書て候、よのつねならば按内をも申てこそあぐべきに、かゝる身の有さまなれば御わたり有むこともかたし、御布施なともかなふべくもなければ、さ

りどていふかひなき山寺口口などに、あそばさせんもいたはしく候、結縁などはさのみこそあれと思て参りて候、かたばかり鐘打ならしたび候なんにやと云、僧都いふやう、聖覺説經などをもつて世を渡ること、皆人しろしめしたる事にて候へども、佛を供養し給をさんだんしやうは、かねて仰を蒙てこそ、表白一筆も按じて仕る事にて候へ只今御前にて申あげよといふ仰ごとならん專に仰候と申す、尼御前何かとことしく有べきやうも候はず、たゞなれに申あげさせ給て候とだにも思候は、信をおこしてこそ候はむすれ、ちと鐘打ならしてたび候へと云、誠に是程の御心ざしにて候へば、御かへり候はむ事、又はなまじへなるやうと云、よろこびして女房中間を召て、御經箱を取寄たり、織物の袋のなべてのさまにも似ぬ心ちするに、名香の匂にまじへて蓮のちり花を貝にすりて、かきけんしやうに銀のふく輪かけたるなども、なべてのさまには見えず、わけて御經をみれば、紺地の表紙に水晶の軸ことしくきどく也、僧都せもんを召て經机けんだい取よせ、此女房御經色紙なるおかむすらむと見るに、一の卷より次第に取出して並べ置たり、すきれんじ經机見しりたる程も女房などいかにかくは有べきといよ、肝つぶれ心にくし、香爐など徒にあれども、わざとしるらむ爲に搔一枝取よせて、鐘打ならし、何となきやうに三度禮拜して、忍やかに當座に源氏

の目錄をむすぶ、桐壺のゆふべの煙、すみやかに、法性の空に登り、帚木のよるのことは、終に覺樹の花をひらかん、空蟬の空しき此世をいとひて、夕顔の露の命を觀し、若紫の雲のむかへを得て、末摘花の臺に座せしめむ、紅葉の賀の秋の夕には、落葉をのぞみ、うゐをかなしび、花の宴の春の朝には、飛花を觀じて、無常をさとりて、たましく佛性にあふひ也、柳葉のさして淨利を願ふべし、花散里に心をどいむといへども、愛別離苦のことわりをまぬかれがたし、たゞすべからくは、生死流浪の須磨の浦を出て、しゆらゑんみやうの明石の浦に至らしむるため也、みをつくし關屋の行あふみちをのがれて、般若の清き砌におもむき、蓬生の深き草村を分て、菩提のまことを願はむ、なんぞ彌陀の尊容をうつして繪合とし、松風に業障の薄雲をはらさん、老病死の朝顔の日影を待むはど也、老少不定のさかひ、乙女が玉かづらかけても頼がたし、谷打出る鶯の初音も、何かめづらしからむ、鳧雁鴛鴦の囀りにはしかと、籬にたはふる、胡蝶も、たゞしばらくの楽しみ也、天人聖衆の遊を思やり、澤の螢のくゆる思、たちまちに智惠の篝火にひかるべし、野分の風に消る事なく、如來覺王の御幸にともなひて、慈悲忍辱の蘭を、上品蓮臺に心をかけて、七寶莊嚴の眞木柱のもとにいたらむ、梅が枝の匂ひに心をとむることなく、淨土の藤のうら葉を翫ぶべし、彼せんとうせんれんのきうじには、若菜を

つみて仙人供養せしかば、成佛得道の因となりなき、夏衣たちるに、いかにしてか一枝の柏木を拾ひて、妙法のたりき木となして、聖衆の音楽の横笛を聞ひ、恨しきかなや佛法の世に生れながら、家をいで名を捨る砌には、鈴蟲の聲ふりたて、かたらふ道にかざりをとく所に、夕霧晴がたし、悲しき哉や人間に生をうけながら、御法の道をえらすして、苦海に沈み幻の世をいとはずして、世路をいとなむこと、まかじたゞ薫る大將の香を改めて、まやうれんの花房に思をそめ、匂ふ兵部卿の匂ひをひるがへしては、香の煙の粧ひとなり、竹川の水を結びては、煩惱の身をすゝぎ、紅梅の香をうつして、愛着の心ざしを失ふべし、待宵のふけしをなげきけむ、宇治の橋姫にいたる迄、うばそくが行ふ道をえるべにて、椎が本にとまることなく、北ばうの露と消なん夕には、解脱のあげまきを結び、東臺の早蕨の烟とのぼらん朝には、梅檀の陰に寄生とならん、司位を四阿のうちにてのがれて、樂しび榮えず、浮舟にたどふべし、これも蜻蛉の世なり、あるかなさかの手習に、往生極樂の文をかくべし、かれも夢の浮橋の世なり、朝な夕なに來迎引接をねがひわたるべし、南無西方極樂教主彌陀如來せんせい、ねがはくは狂言奇語のあやまりをひるがへして、紫式部が六趣の苦患を救給へと許にて、鐘打ならし机おしのけつ、尼御前袖をまぼる事なめならず、女房もふしめになり、まほりより白さうすや

うに包たる砂金百兩取出し、さしおく、僧都是を見るに、只人にはおはせじと思ひけり、女房車よせて出給ふ、僧都さぶらひ法師よびて、車のいたらむ所を見さだめてかへれといへば、見かくしく、に行程に、一條おもてへ出て、白川のかたへやる、法勝寺北を東ざまに、花園へやる程に、日も暮ぬ、くさがはのひむがしの辻、南向に宗門とおぼしくて、もろをり戸の有うちに、からもんたちたる御所見いれぬ、そのへんの人、これは准後の御所と申す、さぶらひ法師かへりて、此由申にこそ、中の關白の御女なればことわりと思へども、思の外なる事もあるぞかし、始よりたゞ人とおぼえざりつるなほいひけり、准後の宮もせいがかく、説經よくし給ふといふ事、今にはじめぬことなれども、凡夫のまわざともおぼえず、當座にて源氏をおぼえて、すこしもとゞこほることなく、次第の巻を一句も落さず、めい、く對句を引合て取あへずすること、たゞ人のわざともおぼしめさず、不思議のことにおぼえけり、御佛事のたびごと、にめされて、法印も參り給けるとぞ聞ゆるや、以上雖多詛譯、依無類本不能校合、

按に、諷誦文のみは湖月抄本に在、又群書類從卷三百十三に源氏物語願文と號して、此諷誦文のみ見えたれど、異同多く、かつ漢文にして校合に能はず、披き見るべし、今鏡卷十、つくり物語のゆくへの巻に、此もの語の事かさつゝけて見ゆれど、文ながけ

れば此にはもらしぬ、

拾芥抄上末に、源氏物語目録ありて、明石の並に浦傳、玉鬘の並に櫻人、東屋並に狹席等の卷の名を載たり、又匂宮をば、薫中將卷とて載たり、

なぐさめ草云、光源氏の物がたりは、五條の三品入道釋阿、河内守光行等專是をもてあそばれけるとかや、此人々よりふたつのながれになり、あるひは定家郷の青べうし河内守が本なといふ事になりぬ、たゞ聊註を存る事のかはれるばかりか、紫式部がことのはとして、藤氏の長者御堂關白殿筆をくはへたまひける也、きはめて義ふかく理あさし云々、

幻夢物語

大原のげんむといふ法師、ひえの山に登りて、花松といふ兒童を見そめしに、其後下野國日光山の竹林院に、此兒あるよしを聞つけ、はるく彼地にいたりつさける夜、兒は親の敵討て、正身もうたれたるよし、人のかたりける事をかけり、卷末に文明十八^丙年四月二日とあり、當時の作り物がたりなるべし、温故堂所藏に寛文八年の鈔本を傳へたり、

古部

こうばい物語

風葉集戀一、關白三君、

苔の衣物語

同書戀五、^{この}一品宮、^{右大}將、

按に、此物語全部五卷は頗あはれに作れる物なり、されど其詞づかひは、やゝ後さまに聞えたれば、恐らくは建長頃なと作り出し物なるべし、夫より後には下るまじきよしは風葉集にも撰べるにてしるかり、但歌員九十九首あるを、風葉にはたゞ二首を載たり、^{物語卷二、十一張右、}思やれ^{云々、}卷^{三、卅六張左、}に小倉山云々^{と見ゆ、}又苔衣と名付しよしは、第一卷發端の文に、逢ての戀もあはぬ歎きも、人の世には様々おほかる中に、苔の衣の御なからひ許あかぬ別れまでためしなく、哀れなる事はなかりけり、又第三卷に山嵐のけはしきに、苔を衣として風を防ぎてのみ過侍る云々、綾羅錦繡にも苔の衣草の枕は、こよなくかへまさに侍りぬべければ、菜つみ水汲ても彼世界へ参り侍らんこそ、年頃の願ひにて侍らめとて、いと口惜く覺したる御けしきは、いひしらす愛たく見奉れば、例のさほうに取ま

かなひて、やつし果給ひぬれば、しうせんの苦の衣着給ふとて、色々に染し袂を、今はとて、苦の衣に、たちぞかへつる、とぞながめられ給ふ云々、とあるに據れり、系圖を、本書には載せず、

心高き物語

拾遺百番歌合右心高幾十首、

色葉集卷三名、物語心たかき、

貞永二年三月二十日明月記云、心高東宮宣旨文詳朝

風葉集春下の、後冷泉院、夏、右大秋上、同大又、後冷泉院、秋下、宣旨、又、右大釋教、宣旨、戀四、宣旨、

又、後冷泉院、

無名草子云、また心たかきこそ春宮のせんじなど、いまの世にとりては古きもの侍れ、まことにことばづかひなごはふるめかしく、うたなごわろく侍れど、いと名だかき物にぞ侍る、略中あさくら、かはぎりなども、かやうのすぢの物ぞかし云々、

こゝろごまり物語

古物語目録に見ゆれを例のおぼつかなし、若次下のこゝろやりにはあらじか、

こゝろのしるべ物語

これも同目録に見ゆれを、出所いまだ考へず、

こゝろやり物語

風葉集雜一式部卿宮北方

こさうしき物語

同集雜一の大納言女

こごうらの煙物語

同集雜二中納言更衣

このついで物語

堤中納言第二段に收めたり、

戀に身かふる物語

風葉集釋教戀に身かふる

狛野物語

枕草紙春曙抄卷九云、こまの、物語は、ふるきかはほりさし出てもいにしがをかしきなり、又同抄卷十一、月の云、こまの、物がたりは何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見所おほからねど、月にむかしを思出、蟲ばみたるかはほりとり出てもとみし

こまにと云てたてるかどわはれなり云々、
 源氏物語巻云紫の上も姫君の御あつらへにことづけて、物語は捨がたくおぼした
 り、こまの、物語のゑにてあるを、いとよくかきたるゑかなとて御覽す、ちひさき姫君
 の何心もなくてひるねし給へる所を、昔の有さまおぼし出て女君はみたまふ云々、
 河海抄卷十盤卷云、古物語の物語なき物語也、うつは清少納言枕草子にも此詞あり、又古萬
 葉集など順集にもかけり、こまの物語くまの、物語などかきたる本もあるがわやま
 り也、古本皆如此云々、

按に、色葉にくまの、物語とあるを既に久部に載たり披きみるべし、

こまむかへ物語

風葉集戀四こまむかへ

按に、無名草子に、又こまむかへことばづかひえんにいみじげなるほとよりは、むげに
 すゑがれにぞある云々と見えたる、こまむかへもこまむかへの寫誤にこそあめれ、

こゆみ物語

風葉集秋上こゆみの賀、彈正の女、

古物語類字鈔卷之中

黒川春村集録

左部

西行物語

按に、此物語を、實録と思へる者あれど然らず、又此本に二種ありて、文段頗異同おぼし、
 其一本は西行法師繪詞と號して、五卷としたる軸物なり、津輕家藏本の跋書に、右五卷
 畫圖者海田采女佑源相保所筆也、段々文字乃愚翁書焉、明應龍集庚申上陽中浣日、槐下桑
 門在判按一條前關白冬良公なるべしとありて、扱其本を飛鳥井大納言雅親卿の息女、一
 位局の書畫一筆に寫されたるを、近衛家より傳來の本といへり、段々の錯亂多く見ゆ
 るは、繼目はなれたるを漫りに修補したるものと見えたり、又薩州家に三卷あり、詞書
 は兼好法師、畫工は土佐吉光、歟行光歟なるべしといへり、三卷なるは闕本なるべし、但
 これぞ此本の元本なるべき、また吾藩の秘庫に一卷、狩野養川家に一卷、尾州にも一卷
 ありと聞く本は別に一部の散逸せしなるべし、又寶永五年の刊本あり、上下二卷とし
 て西行四季物語と標せり、以上一種のものなれども、次第おのゝ同一ならず、執見し
 人の心々に、段々をついでし物と見えたり、さて又一種は西行物語と題せり、正保三年

の刊本は上下二巻とし、寶永二年の後版は上中下三巻としたり、上の繪詞とは大きに異同ありて、此本はた段々の錯亂おほし、此他天明四年の山家集抄に、西行行狀記さい東遊行囊抄卷十九、遊行柳條に、西行物語さい引るは、流以上は我見し本どもなれど、此外布本の文さい異なり、これらには必見まほしきものなりにも猶あるべし、さて此物語は實記ならぬよしをも、聊こゝに辨ふべし、其文云、大治二年十月十日の頃、中とゞまるべき道ならねば、心づよくおもひきりて、自らもどゞりて、切て持佛堂になげいれ、かどの外へ出けるが、さすが廿五年の間住なれし宿なれば、只今ばかりと思にも心のうちかさくらし、中あかつき方におよびて、終に出家を遂にけり、法名は西行といふ云々、以上物語文也、と見ゆるは廿五年の間といひて、生年廿五と聞せたるなれど、これは跡方なき妄談にて、實は大治二年より十三年後なる保延六年十月十五日に、年廿三にて出家ありしなり、其徴は百練抄卷六に、保延六年十月十五日、佐藤右兵衛尉憲清出家、年廿三號、西行法師、また康治元年三月十五日台記に、西行法師來云、依行一品經、兩院以下貴所皆下給也、不嫌料紙美惡、只可用自筆、余不輕承諾、又問年、答曰、廿五、去々、年出、家廿三、抑西行、本右兵衛尉義清也、左衛門大、夫康清子、以重代勇士仕法皇、自俗時入心於佛道、家富、年若心無欲、遂以遁世、人歎美之也、とあるを見るべし、彼大治二年はいまだ十歳の兒童の時なるをや、但吾妻鏡卷六、文治二年八月十五日條には、保延三年八月、通世の

朝遜史、扶桑隱逸傳等も、又物語云、建久九年二月十五日、正念たゞしくして西方に向て、この文に據て誤れり、又物語云、建久九年二月十五日、正念たゞしくして西方に向て、略○中 往生のそくわいをとげにけり云々、とある九年は、元年の寫誤、十五日は十六日の訛謬なり、但これは物語のみならず、古今著聞集卷十三哀傷部にも、西行法師當時より、釋迦如來御入滅の日終をとらむことを願て、中つひに建久九年二月十五日、古寫本、或本十六日に、往生をとげてけり云々、本朝遜史、扶桑隱逸傳、本朝通記、扶桑拾葉集系圖、云々、見ゆ、に往生をとげてけり云々、和漢三才圖會等並に此誤を傳へたり、又和漢合運ハ二月十四と見えたり、さて其正しく見えたるものは、拾玉集卷五に、文治六年二月十六日、按、今年四月十未時、圓位上人入滅、臨終なごまことにめでたく、存生にふるまひおもはれしに、さらにながはず、世の末に有がたきよしなん申あひける云々、拾遺愚草下に、建久元年二月十六日、西行上人身まかりにける、をはりみだれざるよし聞て、三位中將のもとへ、望月のころはたがはぬ、空なれど、消けむ雲の、ゆくへかなしも、上人先年詠云、ねがはくは、花のもとにて、春しなむ、そのささらぎの、望月の比、今年十六日望日也、など見ゆるが如し、續草庵集雜部云、西行上人跡の雙輪寺に住侍りし比、二月十日、又東野州開書に、跡さひし、その二月の春のみ、かまた繪詞に、前文、そのささらぎのもち月のころと云けるにあはせて、都まぢかき雙林寺東山のはどりにて、往生の期をまら得てけり、とあるも例の忘説なり、上人終焉の地は雙林寺にはあらず、河内國弘川寺

なり、そは長秋詠草下云、圓位ひじり歌をも、伊勢の内宮の歌合とて、判うけ侍りし
 ち、又おなじき外宮の歌合とて、おもふ心あり、新少將に必判してとかきければしるし
 つけて侍りける、ことに去年文治五年河内のひろかはといふ山寺にてわづらふ事あ
 りとき、いそぎつかはしたりければ、かぎりなくよろこびのかはしてのち、すこし
 よろしとてとしのはての頃、京にのぼりてと申し程に、二月十六日なむかくれ侍ける
 云々、とあるを見るべし、又繪詞に、大治二年のころ鳥羽殿へ御幸ならせ給ひて、はじめ
 たる御所の御障子の繪、おもしろかりけるを御覽じて、其時の歌よみ、經信大納言、匡房
 中納言、基俊、俊頼按に版本には匡房以下九字を脱せり、又物語なごめされて、我もく
 といとなみよまれける中にも、のりきよをゆされて、此畫せもの中にさるべき所ども
 に、歌よみてまゐらすべきよし、仰下されければ、其日のうちによみつらねて申しわけ
 る云々、とあるもいみじき虚ごとなり、其故はいかにといふに、大納言經信卿は、此大
 治二年よりは、廿八年以前なる、永長二年承徳閏正月六日、匡房中納言は、十四年前なる、
 天永二年十一月五日に薨去ありて、何れも上人未生以前の人なり、但基俊俊頼の兩朝
 臣は、當時現存なりしかども、上人は元永元年の誕生にて、當年十歳の小童なるをや、さ
 れば此一段に據ても、繪詞物語等は實記ならぬ事揭焉なりかし、猶この物語の論らひ

は、遊行柳碑文考註に、詳にいふをみるべし、かかれば作物語なる事決なきが故に、此書
 にはくはへたるなり、

○ ざい 中將物語

更科日記云、何をか奉らむ、まめくしきものはまたなかりなむ、ゆかしくし給なるも
 のを奉らむとて、源氏の五十餘卷ひつにいりながら、ざい中將とをきみ、せり川、しら、
 あさうづなどいふものがたりども、一ふくろとり入て、えてかへる心ちのうれしさぞ
 いみじきや云々、

按に、こは伊勢物語の事なるべし、
 又云、袷衣卷一之上云、まぎらはしに此繪をもをみたまへば、在五中將の日記をいとめ
 であう書たる也けり云々、是は日記とあれど、なほ伊勢物語なるべし、

○ 嗟峨物語

和漢の男色の故事をも多くひきて、其道の事をもをしるし、紀中納言康直卿といふ
 人の公達、松壽といふ兒童を、一條といふ僧のみそめて、戀したひけるに、兒元服して中
 將康則と聞えけるが、をりく、一條のもとに通ひける事を作れり、文明頃などに出來
 けむとおぼしき筆勢のものなり、秋の夜、長物語、松帆物語等をもひけり、温故堂所藏

に古鈔本あり、

さかの物語

風葉集釋教二ののい、又中務卿の女哀傷將、中戀一、四侍從、

狹衣物語

源氏狹衣百番歌合、左源氏、右狹衣、

色葉集卷三、物語さころも、

貞永二年三月二十日明月記云狹衣、文詳三朝

按に、此文次に載る著聞集に合せて考ふべき事あり、貞永二年は則天福元年なり、

八雲御抄卷一云、狹衣大將、

古今著聞集卷十一云、天福元年の春の頃、院藻壁門院の方をわかちて、繪づくの貝おほ

ひありけり、略院の御方御肩ありて、小衣の繪八卷、又さまざまの物語ませて四季に

書て、一月を一巻に十二巻にせられたりけり云々、

苔の衣卷二云、ふけゆくまゝに笛の音すみのぼりて、さころもの大將の、ひかりにゆか

んあまの原と吹すましたまひけん笛のねもこれにはおよばじや云々、

風葉集春下、齋院の又み、夏三首、帝又中務卿の家小宰相、秋上首、帝二又二のい、女又内大又齋

院、秋下院、嵯峨又帝冬、帝四又後院、又齋院、神祇賀茂、又齋院、女又帝三、釋教帝、戀一、帝四、同二、帝四又あ井、同三、帝又あ井、同四、二のい、院女又帝三又あ井、三首、同五、帝六又宰相、又あ井、雜一、女二、院又、中宮、同二、帝、同三、あ井、

河海抄卷一、式部紫式部者、鷹司殿左一位倫子、一條宮女也、略中後左衛門權佐宣孝に嫁して、大貳三位辨局狹衣を生す云々、

無名草子云、さころもこそ源氏につぎてようおぼえ侍れ、少年の春はどうちはじめたるより、ことばづかひなにとなくえんにいみじく、上ずめかしくなぞあれど、さしてそのふしをとりたて、心にしむばかりの所などはいとみえず、又さらでもありなむと覺ゆることもいとおほかり云々、

さゝわけしあさの大將物語

色葉集卷三、物語さゝわけしあさの大將、

風葉集春上、あのい、關白、又相女、春下、中納秋上、八條冬、二關白、又將、中賀八、條又、左大又、左大

又、一品宮のい、

さだめなき世物語

色葉集卷三、物語さだめなき世、

五月物語

風葉集雜一、五月の源

さこのしるべ物語

同集戀一、部卿のみしるべの大君、

さまかるはなふち

こは色葉に見ゆれど、何ぞの誤字あるべし、

小夜寢覺物語

中御門大納言宣胤卿記云、文明十三年二月十日、參内番晝夜、政爲卿相轉之故也、小夜之寢覺被校合云々、

按に此書はよはの寢覺と同じもの歟、與部併せ考ふべし、

志部

しうく物語

こは色葉集に見ゆれどおぼつかなし、疑ふらくはしら、物語の寫誤なるべし、

四季物語

風葉集春上、四季物語の中に、春下、春納言、又、木工頭、又、霞の夏、郭公の、又、如花の、秋上、かみ、又、秋きり、秋下、帝、又、少將、冬、部卿のみ、式、又、侍の、かみ、又、に、君、又、帥宮、の、又、の、帝、哀

傷の君、戀五、郭公、又、あふひの、雜一、ひめ君、

按に別に長明四季物語あれど、かうさまの作り物語ならねばくはへず、但長明のもまた二種有て、歌林四季物語と題したる刊本のかたは、やゝ後世の偽作なり、文明前後の物とおぼし、一本三好修理大夫長慶朝臣の奥書ある本あり、恐らくは真本なるべし、

しぐれ物語

色葉集卷三、物語、しぐれ、

風葉集春上、納言家宰相、秋下、源大納言、冬、中將、戀五、同人、雜三、源大納言む

したうづかた物語

色葉集卷三、物語、したうづかた、

しちのまろね物語

同集卷三、物語、しちのまろね、

しづくににごる物語

風葉集哀傷、中納言、濁戀一、后宮、

按に古物語目録に、平にぬれる中納言とあるは非なり、

しづのをだまき物語

風葉集秋下左近府生

しのびね物語

月詣集戀中みれきぬの條にあり

色葉集卷三物語しのびね

八雲御抄卷一云忍禰

風葉集秋上みかびれ雜三中將

按に、この現存の本は古しへのしのびねならず、眞本はつたはらざめれば、其名を襲て作れりしなるべし、さるは風葉の二首の歌も今本には見えねばどかし、しかのみならず今本の詞づかひをも考ふるに、あないせさせ給ふとあるべきをさせ給ふと見え、このあたりたゞすみありき給つらむとあるべきを、こそのかゝりもなくつらめと結び、しつるかなをしつかなといひ、おはするほをとおはすほといへる類、いづれも近世の筆づかひとみゆれば、必文明頃などの著述なるべし、但これらは寫誤脱字などたすけてもいふべけれど、猶わか君を若とのみいひ、かつは云々といふべきをかつうはといひ、うき事を物うき、笛ばかりなつかしきはなしとあるべきを、笛ほと云々といへるたぐひ、何れもたしかに後世詞と見ゆれば、とてもかくても古本ならぬ事しるかり、

しのぶ物語

風葉集夏新大納言冬院又新大納言戀三少雜二源大納言〇按に、新大

しのぶぐさ物語

同集春上入道一品宮春下二首又中納言又中納言夏中將又中納言又前齋別又先帝又哀傷又關白

しのぶもちずり物語

同集春上右大臣戀四右大將

しみづにぬるゝ物語

色葉集卷三物語しみづぬるゝ〇按に、文
風葉集戀四内大臣の北方雜一北方

正三位物語

源氏物語繪合卷云、つぎに伊勢物語に正三位をあはせて、まださだめやらす、これも右はおもしろくにぎはしく、うちわたりよりはじめて、ちかき世のありさまをかきたるは、をかしうみどころまざる云々、

河海抄卷八繪合云、上三位古物語也、上は正敷

花鳥餘情卷十繪合云、よのつねのあだ事をひきつくるひかされるに、正三位の物がたりの事也、此物語今の代につたはらず、

按に、世に正三位とて全部四卷の物語あり、されど此物語は色葉風葉等にも載て見えぬば、いと既くより散失して傳はらざれば、いふかしくてよく讀考へしに、あらぬ石清水物語なりき、ざるを其本の奥書云、正三位物語、柴田常昭が本をかりてうつさせたる、一かへりよみてあはせたいしつ、寛政六年八月廿一日、本居宣長とあり、此翁も名のめづらかなるまゝに、深くも考へ訂されずして、倉卒に寫されしなるべし、初學まことの正三位とのおもひぞ、又河海抄の注を見るに、源氏の古本には上三位とありしなるべし、こは位階の讀法古來正をじやうと濁音に呼ぶ習なれば、通じて上字をもかきなれし物と見えたり、其例は細井本文徳實錄卷九、天安元年十月丙子條に、上四位下南淵朝臣永河傳又源平盛衰記卷十三に、前伊豆守上五位下行源朝臣仲綱、文明九年正月六日御湯殿上日記に、昨日のじよ位のぎ、御とく日ゆゑことさらにぢんのせん下あり、上卿くわじう寺の大納言、奉行頭辨宰相との、上三位の御一さうあり云々、などあるをみるべし、ふと打見れば寫誤の如くなれど然らず、正治二年十二月、後鳥羽天皇熊野御幸ありしに、切目王子に於て和歌の御會ありし、御一座の懷紙中に、上五位下上總介藤原朝臣家

隆上とありて、これは殊に卿の自筆を、目前に見るところなり、京師某かゝれば本性を本上とかき、或は空穂物語藏開卷に、錠を上とかけるなほよりも、殊によのつねのならひと見えたり、

酒呑童子雙紙

西洞院時慶卿記云、慶長十四年六月十四日、酒天童子ノ双紙讀懸ル、十五日酒天童子ノ双紙讀果ル云々、

按に、下總國香取社の大宮司家所藏本は、詞書兼好法師筆といへり、畫工は誰ならむ尋ぬべし、標題は大江山繪詞とありといへり、又因州侯藏本は、畫工光信とも或は狩野元信ともいへり、御草紙中に亦酒呑童子

白猿物語

長頭丸隨筆云、和文の書ならひは此頃もて遊ぶ白猿物語を學ぶべし、此白さる物がたりは、いつ頃の人の筆としらねども、東山殿の世の前の物なるべしと中院入道殿仰せられし、いかにもやすらかに書たり、是をよく心に學びなば和文は心やすくかくべしと御申有き、此物語の末に心なきけものながらも馴ぬる別の悲しみにたへずして、身をはたしつる事せめて哀なれば、戯れに白猿にかはりて船をしたふ意をよめると

て、中々に、うきをましらの、契哉、見ざるさかざる、むかし思へば
あら、物語

更科日記云、何をか奉らむ、まめくしきものはまだなかりなん、ゆかしくし給なるも
のを奉らむとて、源氏の五十餘巻ひつに、いりながら、ざい中將とをきみ、せり川、しら、
あさうづなどいふ物語ども、一ふくるとり入て、えて歸るこ、ちのうれしさぞいみじ
きや云々、

八雲御抄卷一云、シララ

十訓抄卷七云、しら、といふ物語に、しら、の姫君、男の少將の迎に、こんと契て、遅かり
しを待とてよめるこの心也、たのめつ、さがたき人を、待ほとに、石にわが身ぞ、なり
果ぬべき、著聞集、五亦同、

須部

すき、み物語

色葉集卷三、物語、すき、み、

す、めの物語

風葉集釋教、す、めの物語、

按に、叔父、菟庵、宗先所藏に、雀の發心といふ一卷あり、後柏原院、勾當内侍、書畫一筆とい
へり、高七寸五分許なる巻物なり、子雀のなくなりたるを、親の歎くと聞て、諸鳥訪ひ、各
贈答の歌をよみ、終に其父母發心して、梟の尊阿彌といふが室にいり得度す、刺手は鶴
鷗のグ阿彌といふ、卷末は高野山に登る圖あり、これ上の物語と似たりげにおもはる
れど、風葉の歌とあはねば別なる事炳然し、山科元幹曰、曲亭馬琴の羈旅漫遊録に、尾張
名古屋山崎良民所持といへるものは、此雀の發心のもとの主なるべし云々、又按に、畫
圖品類に雀の松原一卷とあるものは、おのづから別のものなるべし、

○ す、りわり物語

色葉集卷三、物語、す、りわり、

八雲御抄卷一云、硯破、

按に、此物語は、古本今昔物語集卷十九第九段に収めたる物とおなじかるべし、又内藤
攝津守殿藏に、高さ六寸許なる巻物あり、書畫ともに筆者詳ならず、奥書に明應四年十
一月日源義高とあり、義高は常徳院内大臣義尙公、又改名、の本名といへり、長享三年三
月二十六日薨去ありき、たゞし此繪卷の趣意は古本とはいさゝか異なり、

再按、義尚公には非ず、法住院義澄公の本名なり、足利家官位記に見えたり、十七歳の時の眞蹟也。

すまひ物語

風葉集別りのすまひのす又、右大旅、修理亮、哀傷、守女、雜一すけ、の同三、ひな、又、内記の

住吉物語

枕草紙春曙抄九云、住吉、うつばのるる云々、

源氏物語螢卷云、ながあめ例の年よりもいたくして、はるゝかたなくつれゝなれば、御方々繪物語などのすまひにて、あかしくらし給略中すみよしの姫君の、さしあたりけんをりはさるものにて、いまの世のおぼえも、猶こゝろことなめるに、かぞへのかみはほゞしかりけむなどぞ、かのげんがゆゝしさをおぼしなぞらへ給ふ云々、

古本今昔物語集卷十九段十七云、住吉姫君物語書タル障子被立タリシ所也云々、色葉集卷三、物語すみよし、

八雲御抄卷一云、住吉、

風葉集序云、すみよしのこれを入あひの連歌は、小一條院のおほむうたとかきこゆ云々、同旅、住よし、哀傷、關白戀一、關白、雜三、關白二首、又、あま、

河海抄卷十程盤巻しりのけみが云、住吉物語事也、

花鳥餘情卷十四盤巻云、住吉物語に、中納言の娘三人ある中に、一は宮腹にてみめも心もすぐれたりけり、宮づかへせさせむとていだしたてけるを、まゝ母わが腹のむすめに思ひまし給へる事をやすからず思て、六角堂の別當、此姫君にしのびて通ふよし、そら事をいひつけて、あやしき法師をかたらひて、姫君のすむ對よりいで、ゆくよしせさせて、中納言にみするにあさましと思て、宮づかへの事と、まゝりぬ、その後内大臣の子にて、宰相右兵衛督なる人にあはせんとするに、まゝ母またかぞへのかみとて、七十ばかりなるおきな、めたゞれおそろしげなるに、ぬすませむとたばかる、かぞへのかみよるこびて、いつごろと定てけり、これを此ひめ君かへり聞て、ちゝ君のものをにげて、すみよしなる所にしのびてすみけり、此故にすみよしの姫君といふ也、くはしき事はかの物語をみるべし、同卷廿五橋巻云、住よし物語に、姫君の琴ひき給ふを、中將聞つけ侍る事見えたり、同卷廿八蜻蛉巻云、住吉の物語に、姫君の母のめのとの、すみの江にありけるもとへうせていきける事をいふにや、

春曙抄卷九物は云々注云、住吉物語二卷あり、異本十卷あり、源氏物語に用られしは二卷の住吉物語と見ゆ、

按に、此物語の歌を風葉に載たる六首のうち、四首は本書に見えて二首は見えず、流布本の外に異本もあるか考ふべし、又源氏物語に住吉の姫君と見え、枕草紙に物語はすみよし、うつばのるゐといへる本は、殊に別なる古本なるべし、今本の筆づかひを見るに、源氏などにさきだつべき、古代の物とはかけてもおぼえず、かつ小一條院の御製なる連歌を載たるにても、源氏の後ならむとこそ推はからるれ、さて文體歌がら等に據て推考ふるに、此今本は承久の頃などに、いできけむ物とおぼしきなり、古代の本ははやく失けむからに、其名を襲ひて作れりしなるべし、一部の作意は落窪をまねびたらしむ事決なし、但季吟翁のいへる二卷の本は、もし異本か、源氏に用ゐたりし本には非ざる事は、上件に辨へたるが如し、又十卷の本とはいかなる本にか、いともく不審なりかし、

すゐえむ物語

色葉集卷三、物語すゐえむ、

按に、此名目もし寫誤などあるか猶考ふべし、

末葉露物語

治承三年八月三十日玉海云、今日書先日自院所下賜繪末葉露大詞、相具參上付親宗畢、

拾遺百番歌合、右末葉露三首、

色葉集卷三、物語すゐえむの露、

貞永二年三月二十日明月記云、末葉露文詳朝倉條

風葉集春上、すゐえむの露秋上、右大臣秋下、東宮宣旨冬、右大臣別、中納言哀傷、一品賀、關白雜二、おひな

無名草子云、すゐえむの露、あまのかるもとひとてに申めれど、ことばづかひなども、むげにたいありにぞあんめる云々、

按に、古物語目錄に、葉すゐえむの露と見えたるは、此物語を誤れるなるべし、

世部

せり川物語

源氏物語蜻蛉卷云、あまたをかしきるども、大宮も奉らせ給へり、大將殿うちまさりて、をかしきどもあつめて參らせ給、せり川の大將の、とを君の女一の宮思がけたる秋の夕暮に、思わびて出ていきたるかたをかしうかきたるを、いとよく思よせらる云々、
更科日記云、ゆかしくし給なるものを奉らむとて、源氏の五十餘卷ひつに、いりながら

ざい中將とをぎみせり川しらゝあさうづなといふ物がたりども一ふくろとり入て、
えてかへる心ちのうれしさぞいみじきや、

河海抄卷廿卷端云、古物語歟略○中此一帖行成卿自筆本をみ侍りしかば、せり川の中將

とありき、惠心僧都の勸女往生義といふ物に、いまめきの中將、長井の侍従、伏見の翁な
ぞいふ古物語ありといへり、是皆今の世に不傳、此せり河の中將もさやうのたぐひ歟、

按に、源氏にせりがは、とを君を一部の物語とやうにかければ、更科にては又二種のも
のなるが如し、姑く二種のものとして、後考を俟にこそ、

せりつみし物語

色葉集卷三名物語せりつみし、

按に、此物語の趣意とおぼしき事ものに見えたり、奥義鈔卷八云、むかし大和國に猛者
ありけり、いへには山をつき池をほりて、いみじきことをもつくせりけり、門まもり
の姫のこなりけるわらはの、まふくだ丸といひけるありけり、池のほとりにいたりて
せりをつみけるあひだ、猛者のいつき姫君いで、あそびけるを見て、此わらはおほけ
なき心づきてやまひに成て、その事となくふせりければ、母あやしみてゆゑをあなが
ちにとひければ、わらは此よしをかたるに、すべてあるべきことならねば、わが子のし

なむする事をなげくほどには、はゝも又病にふしぬ、その時かの家の女房、此おうなのや
どりにたちいれるに、ふたりのものゝみふせるを見て、あやしみてとふに、おうなのい
はく、させるやまひにあらざ、しかゝのことはべるを思なげくによりて、親子しな
んとするなりといふ、女房わらひて此よしを姫君にかたるに、姫君あはれがりてやす
き事なり、はやくやまひをやめよといひければ、わらはもおやもかしこまりよろこび
て、おきて物くひなせして、例のごとくになりぬ、姫君の云やう、忍びてふみなせかよは
さんに、手かゝざらむ口をし、手をならふべし、わらはよろこびて一二日にならひつ、又
いはく、我父母死なん事ちかし、其後は何事もさだせさすべきに、もししらざらんわろ
し學問すべし、わらは學問して物見あかす程になりぬ、又云、忍てかよはんにはわらは、
見ぐるし、法師に成べし、すなはちなりぬ、又いはく、其事となきにはうしの近づかむあ
やし、心經大般若なせをよむべし、いのりせさするやうにもてなさむと云にしたがひ
てよみつ、又云、猶いさゝか修行せよ、護身なせするやうにてちかづくべしといへば、修
行にいでたつ、姫君あはれみて、ふぢのはかまをてうじてとらす、かたばかまをばみづ
からぬひつ、是をきて、修行しありくほどに、姫君かくれにければ、其よしを聞て道心を
おこして、ひとへに極樂をねがひて、尊きひじりにてうせぬ、弟子ども後の事に行基普

薩を導師に請じたるに、禮盤にのぼりていはく、まふくだ丸がふぢばかま、我ぞぬひしかたばかまといひて、かねうちてことくくもいはでなりぬ、弟子あやしみて問ければ、亡者智光はかならず往生すべき縁ありしもの、はからざるに世間に貪著して、惡道に行むとせしかばわが方便にて、かくはこしらへ入れたる也となん有ける、姫君は行基の化身、行基は文珠也、まふくだ丸は智光なり、智光頼光とて往生したるものは是也、是はうきたることにもあらず、人の文珠供養したる導師にて、仁海僧正のたまひけるなり、さて、せりつみし、むかしの人も、わがごとや、心にもの、かなはざりけむ、といふ歌を詠じて、此歌はこの心をよめる也となむのたまひける、文又綺語抄中云、むかし淺ましかりし賤のをこの、殿ばらの南おもてにて掃除なせしに、おもひがけずみすを風の吹あげたりけるに、うちにつくしきむすめのせりをくひてありけるを見て、わりなく心ざし有けり、思へどもかひなくてありけり、人しれずめし、芹をつみありきけれど、この生さらに心になはでやみにけり云々、文など見えたる、此物語のおもふきなるべし、猶この事は範兼童蒙抄、俊頼無名抄、袖中抄、やうの書どもにどころせく見えて、異同ども、少なからねど、さのみはうるさければしるさず、枕草紙卷二、曙抄内一條、今に、みすのもとにあつまり出てみたまつるをりなせは、わが身にせりつみし

などおぼゆる事こそなけれ云々、狭衣卷三之中に、かく芹つみし世の人にもとはまほしき御こゝろうち、いふ方なかりけり云々、同卷四之下に、びんなくて出させたまふ御心、猶せりつみし世の人にも、とはまほしくおぼされける云々、唐物語成段に、此事の忍びがたきを、又いひあはする人だになかりけれど、せりをつみ、しちにふして、とし頃に成ぬれば、さるべき事にや淺からぬ心のうちを、そらしらせ給にける云々、など見えたるもみなかの故事によれるにてもあるべし、又まふくだ丸の事は、古本今昔物語集卷十一、二段にもみゆれど、それには芹を摘し故事は見えす、

せれう物語

風葉集秋下、せれうの中納言の

曾部

袖ぬらす物語

狭衣卷三之下云、袖ぬらすといふ物語の、せうかう殿の女御も、哀なる心ばへをみつけたまひたりければにや、ねにさはるともいひいで給けむ云々、同卷之下云、見わたさせ給ふは、北山のあたりほうおん寺袖ぬらす宰相の、かよひ給ひし所なせは、をかしかり

しも覺し出らるゝに云々、

拾遺百番歌合、右袖努良須十首、

色葉集卷三、物語袖ぬらす、

貞永二年三月二十日明月記云、左右袖濕、文詳三朝

風葉集夏、袖ぬら又、いほきおほ秋下、准后哀傷、女院又、太政大臣賀、源中又、内大戀二、後朱同五、

太政大臣又、准后雜一、准后又、太政大臣又、朱雀院又、女二宮

按に、明月記には左右袖濕とあり比部考ふべし、

多部

道心すゝむる物語

枕草紙、春曙抄卷九、道心すゝむる、

風葉集秋上、道心すゝむ秋下、右大臣戀一、又右大臣又、中納戀五、右大臣又、右大臣

竹取物語

空穂物語初秋下云、此月にある十五夜にかならず御むかへをせん、此しらべおけることのがはぬ程に、必十五夜にとおもほしたれ、内侍のかみ、それはかくやびめこそさ

ぶらふべかなれ、上こゝにはたなばたおくりてさぶらはんかし、ないしのかみ、こやすがひは近くさぶらはんかし云々、

源氏物語繪合卷云、まづ物語のいできはじめのおやなる、たけどりの翁にうつぼの俊蔭をあはせてあらそふ、なよ竹のよゝにふりにけること、をかしくふしもなければ、かくやびの此世のにごりにもけがれず、はるかにおもひのぼれる契、たかく神世の事なめれば、あさはかなる女のおよばぬらんかしといふ、右はかくや姫ののぼりけむくもゐは、げに及ばぬことなれば、誰もしりがたし、この世のちぎりは竹の中にむすびければ、くだれる人の事とこそみゆめれ、ひとつ家のうちはてらしけめど、もしきのかしこき御ひかりにはならずなり、にけり、あべのおほしがち、このこがねを捨て、ひねずみのおもひかたどきに消たるもいとあへなし、くらもちのみこの、まことのはうらいのふかき心もしりながら、いつはりて玉の枝にきずをつけたるを、あやまちとなす云々、

榮花物語卷廿六、楚王云、こよひの月ぞ誠にかくや姫のそらにのぼりけむ、そのよの月かくやと見えたる云々、

狭衣卷三之下云、竹の中も尋て、世にしばしかげといめさせむなども、おぼさぬなめり

かしと恨たまへば、いで其翁も、此定めにては、いとむとくにこそは侍らめなど云はせに云々、

色葉集卷三、物語、たけとり、

苔の衣卷三云、此御けしきをばげにいみじからんかくや姫なりとも、何かはせんとぞ

おぼさるゝ云々、

風葉集別、たけとりの又みか、雜三、びくや

河海抄卷八、繪合、云、竹取翁、古物語也、

古本今昔物語集卷卅一にも、此物語一段見えて頗異同あり披き見るべし、又假字風土

記駿河國條、及曾我物語卷八、船の事にも、此竹取の古事みゆれど、後人の附會説にて、

いふにもたらざる妄談にこそあれ、

按に、顯昭陳狀にはかくや姫の物語といへり、

たてじごみ物語

色葉集卷三、物語、たてじごみ、

たふのみねのかす物語

色葉にみゆれど何ぞの誤字なるべし、猶可考、

玉がしは物語

同書卷三、物語、玉がしは、

風葉集戀四、玉がし、

たまのを

狭衣卷四之中云、女君いとわびしくてひきかづき給へるを、とかく引あらはしつゝ、

見奉り給ふに、齋院にぞいみじく似奉り給へりける、たまのをの姫君のやうのなるか

ばねの中にて、彼御ありさまにすこしもおぼへたる玉の光だにかよは、袖につゝ

みても見まほしくおぼしねがひつるに云々、此文誤脱もあり、姑く載せ、古物語を

俟に

たまくら物語

風葉集旅、たまくら、

たまも物語

色葉集卷三、物語、たまも、

無名草子云、たまもはいかにといふなれば、さしてあはれなる事もいみじき事もなけ

れども、おやはありくとさいなめとうちはじめたるほど、何となくいみじげにて、おく

の高きものがたりにとりては、よもぎの宮こそいとあはれなる人のちに内侍のかみになりて、もどのおとりのいだしたてられたる、ひろあきいでたるほせこそいとにくけれ、またむねとめでたきものにしたる人の、はじめの身のありさまもとたちこそ、ねぢけばみうたてけれ、なにのかずなるまじきみこしは、のりのしなごだにいとくちをしきものがたりにとりて、あるじとしたる身のありさまは、いとうたてありかし、又いはほにおふるまつ人もあらじといへる女こそ、さるかたにてかゝらぬなをいへば云々、按に、此文よもぎのみやこいふ別ものがたりにかき云々以下

たまもにあそぶ物語

貞永二年三月二十日明月記云、玉藻爾遊文詳朝

風葉集秋下、遊たまもに、冬、院、朱雀、哀傷、女一條院、又、關白、戀一左衛門督、又、關白、又、院、同二、關白、同三、

關白、同四、關白、又、春宮、同五、春宮、

按に、恐らくは上のたまもとおなじ物がたりなるべし、

たゆみなき物語

風葉集秋下、たゆみの中將、冬、藤壺、戀五中將、

知部

ちくまの川物語

同釋教、ちくまの川、又、女院、

ちごまつ物語

色葉集卷三、物語、ちごまつ、

按に、もしちくまの川の脱誤にはあらじか考ふべし、

ちぶにくたくる物語

風葉集秋上、ちぶにくたくる、御息所、釋教、石山歌、戀一左大臣、又、按察御、同二、左大臣、大同三、左大臣、同四、左大臣、

豆部

ついなし物語

色葉集卷三、物語、ついなし、

つかのしるべ物語

古物語目録にみゆ、按に、風葉につるのしるべあり、何れか寫誤にて同物なるべし、
月になぐさむ物語

色葉集卷三、物語名、月になぐさむ、

月まつ女物語

枕草紙春曙抄卷九、月まつ女、

祐子内親王家紀伊集云、月待女といふ物語をみて、いにしへの、月まつ里を、みるにこそ、
哀うき世は、たぐひ有けり、

つくもがみ物語

増鏡卷一序云、かの世繼がむまことかいひし、つくもがみの物語も、人のもてあつかひ
ぐさになれるは、御ありさまのやうなる人にこそありけり云々、

按に、此物語の繪二卷あり、畫工詳ならず、詞云、陰陽雜記曰、器物百年を経て、化して精靈
を得てより人の心を誑す、これを付喪神といふ、是によりて世俗毎年立春に先立て、人
家の具足をはらひ出して路次にすつる事侍り、是を煤拂といふ、是則百年に一とせ
らぬ付喪神の、災難にあはじとなり云々など見えたり、こは伊勢物語の、百とせに、一と
せたらぬ、つくもがみ、われをこふらし、面かけにみゆ、といふ歌を原にて、作れりし物な

るべし、又泣不動の繪卷に、付喪神を祭る圖もみえたり、

土蜘蛛物語

此物語一卷あり、畫工は越前守長隆、詞は兼好法師といひ、或は光顯書ともつたふ、片桐家所藏云ふ、

堤中納言物語

按に、此物語二種あり、一種は堤中納言の事跡を作れり、此中納言は贈太政大臣藤良門
公孫、右中將利基朝臣四男、中納言從三位兼右衛門督兼輔卿なり、承平三年二月十八日
薨去し給へりき、一種は物語十章をつとへて、一部としたる草紙なり、上下二卷の本と
したり、

第一章 花ざくらをゝる少將

第二章 このついで

第三章 ひしめづる姫君

第四章 はどくのけさう

第五章 逢坂こえぬ權中納言

第六章 かひあはせ

第七章 おもはぬかたにとまりする少將

第八章 はなだの女御

第九章 はひすみ

第十章 よしなしごと

以上十段なり、但これを何等の故に、堤中納言とは標したりけむ、もし彼卿の作などや傳へし、さばかりの古物語にもあらじを、いとく不審しき事なり、

つづらこ物語

風葉集釋教つづらこの式部卿宮北方

つまこひかぬる物語

同集春下つまこひかぬる三位中將

露のやどり物語

拾遺百番歌合右露宿五首

色葉集卷三名物語露のやどり、

風葉集別露のやどりの權大納言哀傷中將侍又辨少戀二、一條同五修理大雜一院一條同二入道兵

無名草子云、又露のやどりこの語の中には、ことばづかひうたなともいとあしくも

なし、あまりに人のうせたるぞまがくしき云々、

露わけわぶる物語

風葉集秋上露わけわぶる右大將

つるのしるべ物語

同集戀四つるのしるべの中宮

按に、古物語目録にはつかのしるべとあり、いづれ是なるにか、

登部

さうの中將物語

色葉集卷三名物語さうの中將

ごこ中物語

風葉集哀傷ごこの中戀一、關白、又、みか、又、關白家同四弘徽殿雜一帝、又、右衛門

花鳥餘情卷廿八東屋とこ中といふ物語にも、あづまたうめとて、人のいのりしたるこ

とあり、

ごしあらそひ物語

風葉集賀そのひの母ら

殿うつり物語

枕草紙春曙抄卷九物殿うつり、

ごばりあげ物語

色葉集卷三物語とばりあげ、

風葉集戀五のばりあ

按に、此物語とかはよき舞姫物語とは、一種のものかとおもはるゝよしあり、そのよし

は既に加部にいへり、

ごもすみつけ物語

色葉集卷三物語ともすみつけ、

按に、例の寫誤なるべき事決なし、

取かへばや物語

拾遺百番歌合右取替波也、六首按に、端書中に

色葉集卷三物語とりかへばや、

貞永二年三月二十日明月記云、取替波也、○文

風葉集冬みてものへばやの又前太政大臣旅新中賀中將戀一前關白同二前太政大臣同五内大臣又、

權中納言又あづまの疑ひあり按に、此一首いへるをみらむ

無名草子云、とりかへばやこそはつゝさもわるく、物おそろしくおびたいしきけしたるものさま、なか／＼いとめづらしくこそ思ひよりためれ云々、又云、いまとりかへばやとて、いといたさきものいまの世にいできたるやうに、今かくれみものといふもの、おし

いだす人の侍れかし云々、

山岡明阿彌曰、此物語は新古二種ありしが、古きかたは傳はらず今ある本は今とりかへばやのかたなり云々、又麻績一檢校曰、今本は新古混雜して傳はれるなるべし云々、

春村按に、此兩説いづれも故ありて聞えたれど、今少し委しからず、抑この今本の歌、惣計八十四首あり、卷一に廿一首、卷二に廿一首、然に拾遺百番歌合に載たる八首のうち二首は、今本の卷の一のはじめのかたに見ゆれど、其餘六首は、卷中にみえず、又風葉に取かへばやの某とて載たる歌十三首あれど、今本にあふものはたゞ一首のみなり、卷一はじめのいかにあり、百番又風葉に今取かへばやの某とて載たる七首、春上一首、別一首、四歌合にも載たる歌なり、又風葉に今取かへばやの某とて載たる七首、戀二に一首、同四、二に一首、雜のうち四首は今本にあへり、春上一首、戀二首、殘り三首は卷中に見えず、別一首、一首、雜二、その見えたる四首は、一の卷の末に一首、二の卷に一首、三の卷に二首なり、是に

よりて熟考ふるに、今本の卷の一のはじめの廿葉ばかりは古とりかへばやにて、其末より次々の卷等は、今取かへばやなる事炳然し、但みえぬ歌の三首あるによりて、今取かへばやも亦今一二卷ありけるが、散失せしものなるべき事しるかり、扱古取かへばやは狭衣などにはさしつぎていできしものか、百番歌合色葉等に載たれば何れにも鎌倉以前のものところおぼゆれ、今とりかへばやは鎌倉の中頃なるべし、詞づかひの古からぬを見ても、さやうにはおぼゆるぞかし、風葉集を撰べりし頃は、兩本ならびて行はれしなり、

鳥のねうらむる物語

風葉集戀二、鳥のねうらむる兵部

鳥部山物語

此物がたりは、武藏國に民部卿とて、いといるなる僧ありしが、師の和尚と、もに都にのぼりしに、何がし中納言の若君をみそめて、人しれずかよふほどに、師の國にくだるにしたがひ心ならず下りければ、若君は戀かなしみつゝ、いたくなやみ給ければ、めとすかして其事をとひきき、親たちに申けるに、父母のゆるしありて民部卿を呼のぼせけるが、いまだ都にのぼりつかぬさきに、若君はうせ給ひぬ、扱その七日に民部卿な

と、鳥部山に行て後のわざいとなみける時、僧は自害せむとしけるをやうくといめて、その後は北山に草庵を結びおこなひをりしが、終には行へなくなりしよしをかけり、應永より應仁の間の程なぞかけりけむなぞおぼしきものなり、群書類從第三百十一に收めたり、

ごをぎみ物語

更科日記云、何をか奉らむ、まめくしきものはまだなかりなむ、ゆかしくし給ふなるものを奉らむとて、源氏の五十餘卷ひつにいりながら、ざい中將とをぎみ、せり川、しらら、あさうづ、なぞいふ物語ども、一ふくるとり入て、えてかへる心ちのうれしさぞいみじきや云々、

河海抄卷廿蜻蛉卷、せりがはの大將、ごをぎみの女一の條云、古物語歟、水原抄云、遠君歟云、或又十君云々、此一帖行成卿自筆本をみ侍りしかば、せりがはの中將とありき云々、按に、此物語不審の義あり、せり川の條にいへるをみるべし、

奈部

なかじま物語

色葉集卷三、物語 なかじま、

長月のわかれ物語

風葉集冬、長月のわかぢ、哀傷の式部卿

ながれて早きあすか川物語

同卷夏、ながれて早きあすか川の春宮、又、院、

長井の侍従物語

顯註密勘卷十八、經いさこいにわが世は云、此歌はふしみのおきなどいふ物がたりにあ

り、と惠心僧都の勸女往生義と申造紙に、いまめきの中將、長井の侍従、伏見の翁なんど

いふ古物語ありとのせられたり、さやうの物の有さまをよみたりける歌にや、

河海抄卷廿、卷、云、惠心僧都の勸女往生義といふ物に、いまめきの中將、長井の侍従、伏

見の翁などいふ古物語ありといへり、是皆今の世に不傳云々、

なきなの姫君物語

色葉集卷三、物語 なきなの姫君、

なげきたえせぬ物語

風葉集哀傷、なげき絶せぬ、戀二、中宮、又、大將、

無名物語

本藩秘藏の古巻軸二、上下なり、鑒定家證書云、飛鳥井權大納言雅親卿榮法名息女、一位局書

畫一筆と云々、春村按に、此物語の作意は、時の大臣の姫君うたゝねの夢中に、誰ともな

き上臈に會合する事、數度に及びて、其人を慕ふといへども、更に詮方をしらざるの間、

石山に詣で、通夜する折から、障子のあなたをかいまみするに、左大將と聞ゆる人の、

同じすぢの夢がたりせらるゝを打ち、姫君は胸うちつぶれて、つとめて瀬多の橋に

身を沈めたりしに、大將の船に助けのせかへりて、めでたく榮へ給へるよしを作れり、

始終の詞づかひ後ざまなるもの多かり、上巻に、しはわざあるべきを、しごき、下巻に、いひ、

みらふべき、いふべき、詞を、いし、くも、室町、詞なり、此類の詞づかひは、文明頃、の口つき、

ゆき、疑ふらくは、一位局の、自作自畫自筆なるべし、文章といひ、繪やうといひ、頗殊勝に

見ゆるものなり、但名目の外題見えねば、姑く無名物語として載せつ、

なでしこ物語

色葉集卷三、物語 なでしこ、

風葉集雜一、撫子の院、

難波物語

本朝書籍目錄假名部に見ゆ、
なみちの姫君物語

無名草子云、ありわけのわかれゆめがたり、なみちのひめぎみ、あさちが原の内侍のかみなどは、ことばづかひなだらかに耳たゝしからず、いとよしとおもひてみもてまかるほどに、いとおそろしきことゝもさしまじりて、何ごともさむる心ちこそいとくちをしけれ云々、

按に、なみちはなきなの寫誤にはあらじか、

なみのあめゆふ物語

風葉集春上なみゆふみかじめ、釋教冷泉院、哀傷淑景、賀みか、又入道、左戀五帝、雜一淑景、舍同二女御、

花鳥餘情卷十五野分云、これはむらさきのうす様にかきて、かるかやにつけたるが、紙のいろにたがひたる、と人々どがめたるなり、波のしめゆふといふ物語に、よそへつゝ、みれどかひなし、かくてのみ、ひとりはいかゞ、井出の山ぶき、ふりにたる事なれど、かみの色に似たるこそをかしけれとて、山ぶきにつけ給云々、

奈良葉物語

古物語目錄にみゆれど、おぼつかなき名目也、
なるこ物語

色葉集卷三名物、語なるど、

風葉集夏なるこの中納言、又中務卿の女、釋教鞍馬歌、戀二辨、又致仕大戀、四中納言、同五中納言、又大納言、雜二中務卿の母、同三中務卿の母、

按に、これは古今著聞集に收めたる、鳴門中將物語とは別なり、混すべからず、かれは一名なよ竹物語とも號して實記なれば、風葉にも加へざるに依て、此集にも省きぬ、但かのなよ竹は、建長のはじめにいできしかど、實録なれば風葉には載せぬを、故鎌倉在園の考證には、風葉にのせぬをもて、文永後の物とおもひて其説いたく窮したり、猶この事の論ひどもは、墨水抄に詳にいへるを見るべし、
なれてくやしき物語

風葉集戀二なれてくやしき、大將二首、同五みつら、又式部卿宮、

仁部

新妻物語

古物語目録に見えたり、

奴部

ぬりごめ物語

色葉集卷三、物語ぬりごめ、

風葉集戀一、ぬりごめ、

ぬるへの中將物語

色葉集卷三、物語ぬるへの中將、

ぬれぎぬ

月詣集戀中云、物語の名によする戀といふ事をよめる、藤原伊綱、ぬれ衣とどふ入あ
らば、いふべきに、色にぞしるき、忍びぬの袖標註云、今現に二書とも存せり、但ぬ
按に、忍びぬもまた古しへのは傳はらぬなるべし、今本は後なるものなり、委曲には志
部にいへり、

禰部

ねめぎ物語

按に、古名はよはのねざめと號せり、又さよの寢覺と宣胤卿記に見えたるも、恐らくは
同物なるべし、詳には與部にいふを見るべし、

乃部

のじま物語

風葉集別、のじま、よみ、旅三位、又よみ、人右大將、又三位、戀二、三位、又一品、宮、納言、同三、人、し
す、雜二、中將、

のちくゆる物語

風葉集秋上、のち、悔、秋下、女將、又、女、御、賀、大將、女、御、戀二、み、又、女、將、

古物語類字鈔卷之下

黒川春村集録

波部

はがため物語

風葉集春上、はがため侍

はぎにやごかる物語

同集春上、はぎにやごかるの中將、又、みか夏院、御女、秋上、大將、戀二、大將、又、院、女、同五、大將、

はこや物語

同集戀四、はこやの平のふ

はこやの刀自物語

源氏物語蓬生卷云、ふるめきたるみづしあけて、からもり、はこやのとじかくやびめの物語の、系にかきたるをぞ、時々、のまさぐりものにしたまふ云々、

河海抄卷十、主髪卷、はこやの刀自物語云、女を馬にのせたてまつらし、はやふねつくるべきやうをおほせ云々、

花鳥餘情卷十六御幸云、藐姑射刀自物語、うつたへに御事をいなみの、いなみきこゆ
るにも云々、

按に、上のはこやとおなじ物語なるべきか、

はしたか物語

風葉集春上はしたかの女院院、又辨内侍、夏關白、冬按察大賀臣、大戀二、三條、同三、桐つぼの、同五、三條、雜一、女

はしひめ物語

伊勢物語知顯抄云、物がたりに名をつくる事は、其中にかきわらはすことの心につけてこそ名づけ侍れ、さればこそ橋姫の事をかきたる物語をば、すなはち橋姫と名づけ、から國の事をのみかきたる物語をば、唐ものがたりと名づけ、やまとしまねの事をかきたるをば、やまと物語と名づけたれ云々、

按に、色葉にはしひめと見えたるは、顯註密勘河海抄歌林良材等にいへる、宇治橋姫と同物にて、後世には傳はらざめれど、此事は既に、宇別にまた一種あり、そは畫圖品目云、橋姫物語一卷、畫者姓名不傳、詞白川三位雅喬卿とみえたるものなり、神祇伯雅喬王は六十九歳にて薨去したまへり、此繪卷はいまだ見ざれど、必後代の物なるべし、

はずるの露物語

こは古物語目録に見ゆれど、すゑばのつゆの寫誤とこそおぼゆれ、

長谷雄卿物語

此物語は紀長谷雄卿、朱雀門の樓にのぼりて、鬼神と雙六を打たりしに、美女をかけ物にしたりけるが、長谷雄卿勝にければ、いみじき女をえて寵愛のあまりに、七十五日のち會べし、と鬼神のいましめたりしをも思はず、日ならずして寐たりければ、その女とみに水になりて、流れうせけるよしをかけり、畫工は土佐行長といふ説あり、

禁秘抄階梯云、守覺法親王記建久、二、鬼間繪之事、人に見之、先年相尋繪所之處、固辭申、終不顯其繪樣如何、爲長云、凡此條自古至今、雖聞鬼間名、未見其消息云々、秘藏故歟、然存人尤希也、不可言上之由辭申、賦目於兩卿、親經資實同辭之、予答云、鬼王三面三目有一角、其色赤色也、間良方畫之、形如迹去勢、又勇士壹人、提劍如追鬼、々王願勇士走形也、此時爲長云、朱雀門鬼者、鬼間鬼王所變也云々、彼鬼王青色一面也、長谷雄卿記有之云々、赤色青色異説也、後可決之、と見えたり、長谷雄卿記は恐らくは件の草紙なるべし、

はつね物語

風葉集秋下はつねの太政大臣神祇御息所の旅入道太哀傷同大又し太政大臣賀同大又入道

大_臣又_入し_道ら_太み_臣人_太戀_政一_大關_臣白_太又_入し_道か_太ま_臣の_太同_政二_大入_道太_臣又_太し_政か_大ま_臣の_同四_政入_道太_臣雜_一院_高陽_又

はつ雪物語

無名草子云、はつ雪といふ物がたり御らむせよ、それにぞものがたりのことは見えて侍る云々、

はな宰相物語

風葉集旅_{はな}相_みの_戀五_み又_女登_花殿

はなざかり物語

同集雜二_{はな}の_中宮_か

花ざくら物語

赤染衛門集上云、どのにはなざくらといふ物がたりを、人の參らせたるつゝみがみにかいたる、かきつむる、心もあるを、はなざくら、あだなる風に、ちらさずもがな、返しせよと仰せられしかば、みるほどは、あだにだにせず、花ざくら、世にちらむだに、をしとこそおもへ、

花ざくらをゝる少將物語

堤中納言第一段、花ざくらを折る少將、

風葉集春下_花を_中將_ら

按に、本集と風葉とは、中少將のたがひあれど、風葉の歌本集にあへり、又上の赤染集なるも、恐らくは同物なるべし、

はなだの女御物語

堤中納言第八段、はなだの女御、

はなのしるべ物語

風葉集戀一_{はな}の_つま_君し_る

はなふち物語

「古物語目録に見ゆれどおぼつかなし、可除、」

色葉集卷三_名物_語は_なふ_ち

はひずみ物語

堤中納言第九段、はひずみ、

風葉集戀三_はひ_ずみ_よ

按に、風葉のうた本書にあへり、また猿樂の狂言に、すみぬりといふがあるは、この物語

の趣向をとれるなり、
濱まつ物語

此物語の古名は、御津濱松と號せり、美部に委しくいふをみるべし、
はま、つがえ物語

色葉集卷三、物語はま、つがえ、
按に、是も濱松物語なるべし、

はまゆふ物語

色葉集卷三、物語はまゆふ、
風葉集春上、はまゆふ、雜二、宰相

被ごんごん

此雙紙は尾州家の秘庫にあり、書畫ともに詳ならねど、元弘建武頃に出來し物ならん
といへり、また摸本をも獲ざれば其體裁を辨へず、

春雨物語

勢州松坂驛、長谷川某所藏に、古卷軸一卷ありと或人いへり、いかなる物かたづぬべし

比部

肥後物語

本朝書籍目錄に、肥後物語一卷と見ゆ、

左右袖濕物語

貞永二年三月二十日明月記云、左右袖濕文詳三朝

按に、此物語は、諸書に袖ぬらすとのみ見えて、左右の二字をしるさず、既に會部に
ひぢぬいしま物語

風葉集春上、女ひぢぬいしまの中納言、又、關白、又、中務、春下、式部、卿、釋教、關白、旅、内、大、賀、朱雀、戀四、關
白、雜一、關白、又、宮女、又、院、朱雀、同二、中務、卿、御子、女、

一口物語

看聞御記永享三、三、八、云、抑禁裏唐鏡有、觀覽度之由被仰下、累代之御本十卷進之、始終可進置
之由申入、於累代之物者始終可進禁裏者也、一口物語一帖同入見參、

人たがへ物語

風葉集戀一、人たがへ、同四、春宮の

人にかはれる物語

同集戀四、人にかはれる

ひこめ物語

枕草紙春曙抄卷九人め、

ひごりごご物語

風葉集別ひごりごご旅齊宮戀二正の同四按察大

ひなぶり物語

古物語目録に見ゆ、

ひっこかしづく物語

色葉集卷三名物語ひるこかづく按にし文字

風葉集春上ひるこ頭中將賀内大

按に、ひるこは玄孫なるべき事決なし、

兵部卿物語

按に、此物がたりは頗作意見えて、古物語めきたる物にはあれど、をりくつたなき詞
ども、まじり、かつ色葉、風葉、無名草子等にも見えねば、室町の中頃なとに、作れりし物
なるべし、一部の大意は今上の二宮、兵部卿と聞ゆるみこの、伯父宮なりし故式部卿の
みやの、姫君を戀給ひて、人しれぬ歎きをし給ひ、つねにふしづみてのみおはしまし

しを、姫君齋院にさへ定り給ひにしかば、今はいかにともせむすべなきまゝに、いかで
それに似たらむもがなど、心をつくしてもとめ給ふほど、故按察大納言の女のみなし
とにて、西の京なる大膳亮の家に、いとかすかにておはするを見出給ひ、なにがし中將
とかや作り名して通ひそめ給へりしに、時の右大臣の姫君北の方に定り給ふ事いで
きて、みこは心にもあらぬいそぎを思ひわびつゝ、ひたごもりにこもりてのみましま
し、久しく音づれ給はざりしかば、按察の君は絶にし中を悲しみ、かつは世のたづさ
へになくなりししかば、めのと子にすゝめられて、彼右大臣の姫君のかたに、宮づかへ
に出給ひぬ、さて日ごろ経て宮も見つけ給ひければ、しのびて局に通ひ給ふ事たびか
さなりぬ、按察の君はあるまじき事となげさけるが、ひそかに局をのがれいで、しる
べのかたに嗟峨にかくろひ、終には尼とさへなれるよしをかけり、大むねはかの孝標
朝臣の女、よはの寢覺の作意をとりて、つくりかへし物なるべし、

日ろる大津のわな物語此條は除

色葉集卷三に見ゆれど、寫誤と見えて難解、

再按、これはいちひ拾ひと、大津の王子となり、伊部にもいへるを見るべし、

布部

福富草紙

こは高向秀武といふ者、何師いふに秀武可考年老貧しかりしに、妻のすゝめに隨ひて、道祖神を祈りたりしに、小柑子許なる鐵鈴を賜はると、靈夢の告を蒙りぬ、さて其妻の合せて云、身のうちより聲の出きて、夫によりて幸ひを得むといへり、然るにをかしく屁ひる事を習ひて、何某の中將殿に召れ、綾錦黄金等を賜はり、いみじき福人となり榮えぬ、是までは上巻なりさて此隣に七條の坊長福富といふあり、これはた貧しかりければ、其妻となりをいたく羨み、男にすゝめて秀武が弟子とし習はせていだしやりしに、此福富は屎まじりしちらし、打懲されて歸りこしかば、其妻いたく恨み怒りて、秀武を責さいなむよしをかけり、是までは下巻なり文體はいとしどけなくみゆれど、四五百年前の筆づかひとぞおぼゆる、但此粉本をみるに、下巻の繪やうは凡ならず、上巻は頗劣れり、されば原本は下巻のみにて、上巻は後人の蛇足なめりとかたぶきいふ人わなりとさけども、全文まさしく一具したれば、もとより上下の二巻なりしを、はやくより上巻は逸して、次々に寫し僻めたりしにも有べし、もしさやうにもやと推量らるゝ由は、江戸本所の

里正關岡長兵衛、新吉原町玉屋山三郎等の所藏に、もし原本にやとおぼしき程の繪卷あれど、何れも下巻のみにて上巻なし、是等によりて上巻は後人の書添けむといふ説も起れるにやあらむおぼつかなし、又傳へ聞く此繪卷は土佐彈正忠廣周筆といふ説あり、廣周は寛正頃の人なれど、文體の古雅なる事、今百餘年も古げにおもはる、こはもし古卷の下の卷のみを、廣周が寫せるにはあらぬか、又平安妙心寺の藏に、上下二卷ありて光信筆といへり、光信は文明後の人なれば、これはた古卷を寫けむ事疑ひなし、にもかくにも原本二卷は南北朝の時代なぞに出來けむものなるべし、又按ふに、尾州家御藏の稜とんとといふ繪卷は、もし此福富の上卷にはあらじか、名目のさますこし由ありげにきこゆ、されど其繪を目撃せしにあらねば、うけばりていふにはあらず、

吹こす風物語

風葉集冬、吹こす宰相中将

ふくらすゝめ物語

色葉集卷三、名物語ふくらすゝめ、

風葉集春下、ふくらすゝめ大臣

ふくろかけ物語

同集戀一、ふくろの女御、同二、大將、

伏見のおきな物語

顯註密勘卷十八経いざむいのわが世は云、此歌はふしみのおきなといふ物がたりにありと、惠心僧都の勸女往生義と申造紙に、いまめきの中將、長井の侍従、伏見の翁、なんどいふ古物語ありとのせられたり、さやうの物の有さまをよみたりるけ歌にや、
河海抄卷廿卷蜻蛉云、惠心僧都の勸女往生義といふ物に、いまめきの中將、長井の侍従、伏見の翁、なんどいふ古物語ありといへり、是皆今の世に不傳云々、

ふせご物語

狭衣卷二之下云、風のあらしに、御とのあぶらも消にけり、しそくもてまぬれなといふなるにも、たいかうにて、ふせごの少將のやうになりなまほしけれど、かひなき物からかくれるて、いかにわびしいみじとおぼすらむと云々、同卷三之下云、こよひさへさだにあらば、やがてかくながら、ふせごの少將のやうにもなりなんと、心まどひもよのつねならぬに云々、
風葉集夏ふせごの、又、内侍、

ふせや物語

同集旅、ふせやの、

二子の宮物語

同集雜三、二子の宮、又、關白、

ふたばの松物語

同集春下、ふたばの松、雜一、おなじ、

ふたよのごも物語

同集冬、ふたよの上人、雜二、ひじ、又、不斷念、

ふもご物語

風葉集雜一、ふもごの大將、同二、后宮、同三、おなじ、

ふりや物語

色葉集卷三、物語、ふりや、

按に、古物語目録は、ふるやに作れるよろしげなり、又おもふに、上のふせやの寫誤には
あらしか、
故郷物語

色葉集卷三物語 故郷、

ふるさこたづぬる物語

風葉集夏ふるさこたづぬる 櫛中納言戀三源大納言女
按に、上の故郷も同物なるべし、

保部

ほごほごのけさう物語

堤中納言第四段、ほごほごのけさう、

風葉集戀五ほごほごのけさうの
式部卿宮姫君待風、

按に、風葉のうた本書にあり、

萬部

松が枝物語

枕草紙春曙抄卷九物 松が枝、

色葉集卷三物語 まつがえ、

松殿物語

本朝書籍目錄假名部云、松殿物語二卷、

松帆物語

こは四條中納言の若君侍従のきみと聞ゆる、と宰相のきみといふ僧と、男色のかたらしひ有けるに、殿の大將どの若君をばめしとり、僧をば淡路のまつほの浦にながし給ひぬ、さて若君は悲しび給て、入水のさまにいつはりなし、ひそかに彼嶋にわたり給けるに、宰相もこひやみして、七日さきにうせぬと聞えければ、身をなげむとし給けるを、人のとひむるまゝに、出家して高野山にのぼり給ふよしをかけり、卷末に兼載在判とあるを見れば、此連歌師の作かともおもへど、嵯峨物語の序に、秋の夜の長物語は、膽西が道心のみだし、松帆の草子は少年の風流をそふ、などあるにつけても、いまずこし古きものにて、兼載は傳寫せしなるべし、群書類從卷第三百十一に收めたり、
又按に、廣益俗說辨卷卅二に、苔衣は、四卷あり、古代の物也、其抄出せるを松帆物語といふ、といへるは何によりていふにかあらん、苔の衣と松帆とは、時代も作意もいといたうたがへる物をや、

松浦宮物語

塵袋卷七云、松浦ノ宮ト云フ物語ニハ、筆策ヲバモロコシニハ、簫ト云フヨシヲカケルハ實説歟、松浦ノ宮ト云フ物語ハ、ナベテノ物語草子ノ様ニハアラデ、ゲニゲニシキヤウニモ、モロコシノ事ヲカキタル物ナレドモ、謬ハ無力事歟云々、十一に塵添藎壘抄又卷此文を載たり、

風葉集夏まつらの宮神祇住吉別のあみこ、又のみむなび又冬將又のみすこ又しもの后又參木旅氏忠又參木安又氏忠戀一公華陽又氏忠同二氏忠同五氏忠雜二氏忠又皇女

無名草子云、まつらの宮とかやこそ、ひとへに萬葉集のふせいにて、うつばなせ見る心ちして、おろかなる心もおよばぬさまに侍るめれ云々、

按に、此書卷末に、貞觀三年四月十八日、そめ殿の院のにしのたいにてかき終りぬ云々など見えたるにつきて、やゝ古き世にいできけむなど、いまだしきゝは、思ひもすめれど、文體詞づかひ等を考ふるに、鎌倉のはじめのはとなど、作り出し物なるべし、風葉のうたはみな本書にあへど、色葉には名目見えねば、さのみ古からぬ事掲焉なるものなり、

窓のをしへ

骨董集卷中右に女房の火爐にて足を煖むる圖を載たり、さて云、窓のをしへといふ

るき繪卷に載たり詞花堂藏とあり、春村いまだ此繪卷を見ず、詞花堂は故細井貞雄法名阿なり

まよふ琴のね物語

風葉集春上まよふ琴のね、又しらす、春下不讀人、又春宮、夏春宮、秋上春宮、秋下按察大納言

美部

みかきがはら物語

同集春下みかきがはらの院、又の院、夏内大、秋上院、又一品、又中宮、秋下大臣三君、又春院、又皇太后、又大納言、又五世、神祇みか、又齋院、哀傷春院、又后宮、又賀后宮、又二宮、戀一内大臣、又五首、同三右大、又女二、同四女二、又みか、又三君左大臣、又ふぢつば、又大將、同五二首、又將大、又雜一將大、又みか

みかはにさける物語

拾遺百番歌合右、參河仁佐介留十五首

貞永二年三月二十日明月記云、御河爾開朝倉條

風葉集夏みかほにさ冬關白又女院の戀二皇后宮又前關白又關白同四尙侍又女院
匣同五前關白

無名草子云、みかはにさけるこそうたはよけれ、東宮宣旨といふ人、うきにまたつらさをそへて、なげ、とや、さのみはいか、ものは思はむ、とよめるもまたそれならずもいと多かり云々、

三國物語

本朝書籍目錄假名部、三國物語一卷、

みこがへ物語

風葉集戀三内侍のかみの

みたらし川物語

同集春下の内大臣、川神祇賀茂、又齋院中釋教石山歌、

水あさみ物語

同集秋上承香殿女御、秋下右大臣又家の辨冬門督釋教内大哀傷承香殿戀一將右中同二、

大納言めのこ、

みづからくゆる物語

更科日記跋云、私たちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也、母は倫寧朝臣の女、傳のどの、は、うへのめいなり、よはのねざめ、みつのはま、つ、みづからくゆるあさくらなどは、此日記の人のつくられたるとぞ、

狭衣卷一之上云、母めのとより外にあたりにもよせず、さほもなくこそかしづくなれ、みづからくゆる宮腹の、むすめのやうにやあらむとてわらひ給へば云々、

色葉集卷三、物語、みづからくゆる、

風葉集秋上みづの源宰相又宰相秋下左大戀三將左大又右大尙侍又彈正女雜二尙侍同

三中將、

みづのしらなみ物語

風葉集秋上みづの冷泉院、雜一、朱雀

みつのはま、つ物語

更科日記跋云、私たちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也、母は倫寧朝臣の女、傳のどの、は、うへのめいなり、よはのねざめ、みつのはま、つ、みづからくゆるあさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ、拾遺百番歌合、右御津濱松、常陸介孝標女作十五首、

貞永二年三月二十日明月記云、御津濱松文詳三朝倉條

八雲御抄卷一云、濱松中納言、

風葉集春上はまいつ、春下中納言、夏中納言、秋上中納言、冬中納言、又しらみ人、又中納言、別東宮、又中納言

首、又山の僧正、又宰相、旅中納言、哀傷左大將、戀二、中納言、同四、大貳、又大臣五君、の雜

一、中納言、同二、中納言、又五君、又みか、同三、宰相、又中納言、又河陽、

無名草子云、みつのはま、つこそ、ねざめさごろもばかりのよのおぼえはなかめれど、ことばづかひありさまをはじめ、なに事もめづらしくおはれにもいみじくも、すべて、ものがたりをつくとならば、かくこそおもひよるべけれ、とおぼゆるものにて侍れ云々、

按に、此物語を濱松とのみ號して、本名はみつの濱松なる事をば、しらぬ人もありげなりかし、されば群書一覽にも、濱松物語作者詳ならずといへり、孝標朝臣の女の作なるよしは、上件に見えたるが如し、さて又今本四卷なるは、第一卷散失したるものにて、まことは五卷のものなりしさまなり、其故はいかにといふに、今本のけじめの文、發端とものに聞えぬうへに、拾遺百番歌合に載たる、十五首のうち十三首は、今本にあひて見ゆれど、今本一巻一に八首、卷二に四首、卷三に二首、卷四に三首、其餘九首は、

とて都へ、中納言かさくらす、涙は袖に、さわぎつゝ、もろこし船に、けふぞ乗ぬる、三十番右に、中納言唐にわたりて後、さまゝ、思ひくだけて、大將姫君うしとだに、おもひ出ど、どしのべども、猶あまのどを、わけがたの空、と見えたり、今本は中納言もろこしに行つかるゝ、どころより見ゆるを、歌員百五、此二首は夫よりもまへかたに係れり、又風葉に撰べる廿八首のうち、十九首は今本にあへど、今本一に十首、卷二に三首、其餘九首はみえず、そは離別部に、中納言もろこしへ思ひたち侍とて、いとま聞えけるに、月いとあかゝりければ、濱松の東宮、いかばかり、涙にくれて、おもひいでむ、西にかたぶく、月をみつゝも、御かへし、故郷のみかさの山を、おもひいで、われもいかゞは、月をみるべきもろこしにわたるとて、道より女のもとにつかはしける、濱松の中納言かさねけむ、ことどくやしき、から衣、袖のみぬるゝ、つまとなりけり、返し、山の僧正母から衣、たちはなれなば、われのみぞ、うらむる袖も、くちはてぬべき、哀傷部に、此世のほかになりなば、哀と思ひなむやと申侍ける人に、濱松の左大將女けふりけむ、人を誰とも、しらぬだに、ゆふべの雲は、あはれならずや、雜一に、人を行へしらすしてなげき侍ける頃、尾花の風になびくをみて、はま松の中納言尋ぬべき、かたしなければ、古郷のをばなが袖に、まかせてぞみる、雜三に何となくみなれ侍ける女を、ゆくへしらすなして侍ける所に

て月を見て、濱松の中納言思ひいづる、人しもあらし、ふる郷に、心をやりて、すめる月かな、中納言のもとに、あかつき立よりて侍けるに、いみじく尊とく經をよみすましてゐあかしけるにやと見えければよめる、はま松の宰相中將ひとりしも、あかさじとおもふ、床の浦に、おもひもかけぬ、浪の音かな、と見えたるも、みな渡唐以前の歌ともなるべし、猶この外にも春下に、よし野よりいで、侍ける頃、花のちるを見て、濱松の帥宮中君とて歌は闕たるあり、こはもし今本四の巻のうちなるべくやとも思へど、さらにそれとおぼしきもおもひよらねば、これはた首巻のうちなるべし、かゝれば首巻は闕てみえねど、上件の端書どもにて、おろく、おもふきはしられたりかし、

季吟翁曰、胡月抄はま松の物語といふ物にも並一帖あり云々、

春村曰、濱松に並ある事いまだ考へず尋ぬべし、

みなせ川物語

風葉集冬、みなせ川の別、左大將又、入道一品又、同卿戀一、新中納言同二、左大將同五、新中納言雜一、左大將又、前關白太政大臣、同二、左大將同集秋下、みふねの冬、太政大臣、釋教、皇后戀二、式部卿の女又、右大臣大雜三、太政大臣

みふね物語

同集秋下、みふねの冬、太政大臣、釋教、皇后戀二、式部卿の女又、右大臣大雜三、太政大臣

みやまがくれ物語

同集春下、みやまがくれの夏、式部卿の女戀五、宰相又、みらみ人みれごもあかぬ物語

同集夏、みれごの中将又、關白

無部

むぐらのやご物語

同集雜三、むぐらの女院

むしめづる姫君物語

堤中納言第三段、むしめづるひめぎみ、

免部

めもあはぬ物語

風葉集秋下、めもあはぬの辨、冬、右大臣戀四、右大臣

毛部

もち月物語

色葉集卷三、物語名もち月、

もこのしづく物語

風葉集秋下、もこの大將又、太政大臣女

もにすむ蟲物語

同集冬、もにすむむし

ものうらやみ物語

色葉集卷三、物語名物うらやみ、

ものねたみ物語

風葉集夏、もねたみ殿息所、

按に、此二名恐らくは同物なるべし、

也部

やせがは物語

風葉集夏、やせがはのすけ、戀二、右衛門督

山かげ中納言物語

八雲御抄卷一云、山蔭中納言、

古物語目録に見ゆ、

按に、此物語は、山蔭卿の子息、如無僧都のをさなかりし時、繼母惡みて海に落し入たりしを、さきに中納言の放たれし龜の助けあけし事をかけるにはあらじか、もし然らば實記とも云べし、古本今昔物語集卷十九廿九十訓抄上四段其外にも此古事見えたり、

山ぶき物語

風葉集春下、やまぶきの三位中將、

やみのうつゝ物語

同集哀傷、やみのうつゝの大納言更衣、又、左大將戀四、左大將

由部

雪のうち物語

風葉集秋上梅つぼ女御、釋教、ひじ 又梅つぼ
ゆくへしらぬ物語

色葉集卷三物語 ゆくへしらぬ大將

風葉集春下ゆくへみかみ、又、帝、又、院、又、將、大、戀二、將、大、又、みか

夕ぎり物語

同集冬夕ぎりの

夢がたり物語

同集神祇夢がたり、旅、宰相、哀傷、前、關、戀一、前、關、雜二、宰相

無名草子云、ありわけのわかれ夢がたり、なみちのひめ君あさちが原の内侍のかみな
とは、ことばつかひなだらかに耳たゝしからず、いとよしと思て見もてまかるほそに
いとおそろしき事どもさしまじりて、何事もさむる心ちするこそいとくちをしけれ
云々、

夢路にまごふ物語

風葉集春下ゆめおちの、大納言女、別、言女、又、關、白、戀二、式部卿、又、言女、雜二、むすめ

ゆめのかよひち物語

同集秋上夢の中、君、ひ、戀二、しらみびと

ゆめゆるものおもふ物語

同集戀二夢のあめ、わかみこ、又、中宮、雜一、中宮

ゆるさぬ中物語

同集戀二ゆるさぬ中

與部

横川物語

全部三卷、貞享年中西園寺内府按、圓壽光院、左、真蹟本あり、温故堂所藏本なり、惠心僧都
の事より書そめたれば、横川物語とは名づけしなるべし、文體よろしくやゝ古げなる
物語なり、

よしなしごご物語

堤中納言第十段、よしなしごと、

よしの山物語

色葉集卷三物語 よしの山

湖月抄寄木五右に、師云、ね覺の物語、今の世に見えずとあるは失考なり、
よもぎがはら物語

風葉集哀傷よもぎがはらの春宮、戀一、春宮、同三、春宮、

按に、色葉に逢の中將といふ名目見ゆ、逢はもし蓬の字にはあらじか、

世をうち川物語

風葉集雜二の世をうち川のあはぢ、川

和部

わかくさ物語

色葉集卷三名物語わかくさ、

わが身にたごる物語

風葉集秋上わが身にたごるの宮大將、冬、宰相、戀二、關白、同四、院女三宮、雜一、北方、言又、關白、

わくらはの物語

古物語目錄にみゆ、

わたらぬ中物語

色葉集卷三名物語わたらぬなか、

風葉集秋下わたらぬなかの承香殿女御、戀四、みか、雜二、言、大納、同三、方、北、言、大納、

われから物語

同集冬われからの賀式部卿、又、侍從の、雜一、守女二首、同二、兵衛、同三、みか、女の

われはづかしき物語

同集雜一われはづかしきの女院、

乎部

をぐら山たづぬる物語

同集秋上をぐら山たづぬるの女院、大納言、戀一、院、

をぐるま物語

同集秋上をぐるまの麗景殿女御、冬、女御、なじ

をだえのぬま物語

同集春下をだえのぬまの皇太后宮、又、右大臣、大神祇、大戀一、春宮、大、同二、春宮、大、又、接、言、察、女、同三、二、侍、又、内、大、
同四、春宮、又、ない、み、同五、春宮、雜一、ない、み、又、右、太、同二、春宮、大、

無名草子云、をだえの沼わまりにいまめかしくこそおぼゆれ云々、
をのへ物語

風葉集秋上、なへの按察大納言家小大輔

忌衣物語

古物語目録にみゆ、但小忌衣の脱字なめり、

をんなすゝみ物語

風葉集春上、女すゝみの又、右大秋上、前右大又、中宮、冬、左大神祇、左大別、中宮、權、哀傷、先帝、

又、みか、又、中將、戀一、左大同二、左大又、前太政、大同三、先帝、同四、女登花殿、雜一、女御、同二、た

女、同三、將、左大、又、内、大

女のすくせゑらす物語

同集哀傷、女のすくせゑらす又、右衛門、戀一、臣、大同五、み、第一の、又、第二の、み、雜三、み、第三の、又、左

臣、

をんなのひかけ物語

色葉集卷三、名、物語をんなのひかけ、

をくらしい物語

西譽上人當麻曼陀羅疏卷十一、右七に、了譽古今序註卷一を引て、をくらしいと云物語あり
といへり、序註を檢して此に載すべし、

墨水遺稿卷之一終

門人 加藤才次郎校字

